

日本独文学会
2015年 秋季研究発表会

JGG – Herbsttagung 2015

研究発表要旨
Abstracts

2015年10月3日(土)・4日(日)

Am Sa., 3. und am So., 4. Okt. 2015

第1日 午前9時50分より

第2日 午前10時00分より

1. Tag: ab 9.50 Uhr

2. Tag: ab 10.00 Uhr

会場 鹿児島大学 郡元キャンパス

Universität Kagoshima

Kōrimoto Campus

発表者・発表会場一覧表

発表者・発表会場一覧

2015年10月3日(土) 9:50~13:00				
10月3日	A会場(111教室) シンポジウム I	B会場(121教室) 口頭発表:文学 I	C会場(131教室) 口頭発表:ドイツ語教育・語学I	D会場(211教室)
9:50~9:55	開会の挨拶 (A会場・111教室)			
10:00~10:35	シンポジウムI (10:00~13:00) 旅と啓蒙	松原 文	柴田 青子	
10:40~11:15		北原 寛子	牛山 さおり	
11:20~11:55		高木 靖憲	細川 裕史	
12:00~12:35		坂本 彰希絵		
12:35~13:00				

招待講演 文学
Helbig
(13:00~14:00)

発表者・発表会場一覧

2015年10月3日(土) 9:50~13:00			
10月3日	E会場(125教室) ブース発表 I	F会場(124教室) ブース発表 II	G会場(122教室) ポスター発表
9:50~9:55	開会の挨拶 (A会場・111教室)		
10:00~10:35			ポスターは10時から掲示
10:40~11:15			
11:20~11:55	ブース発表I (11:30~13:00) Diana Bajer-Taguchi Tertiärsprache Deutsch in Japan	ブース発表II (11:30~13:00) ミツ石・野口・山口 Anatomieから来た BennとCelan	
12:00~12:35			
12:35~13:00			

ポスター発表2件
13:00~14:30
(発表者特権)
大暮 / 齊藤・田原

2015年10月3日(土) 14:30~17:30				
10月3日	A会場(111教室) シンポジウム II	B会場(121教室) シンポジウム III	C会場(131教室) 口頭発表:文学 II	D会場(211教室) 口頭発表:語学 II
14:30~15:05	シンポジウムII (14:30~17:30) Literarische Öffentlichkeit in der DDR	シンポジウムIII (14:30~17:30) 引き継がれた「現在」	森林 駿介	嶋崎 啓
15:10~15:45			山尾 涼	田中 慎
15:50~16:25			渡邊 健明	岡部 亜美
16:30~17:05			野内 清香	成田 節
17:05~17:30				

18:00~20:00 懇 親 会 (学習交流プラザ)

2015年10月3日(土) 14:30~17:30			
10月3日	E会場(125教室) ブース発表 III	F会場(124教室) ブース発表 IV	G会場(122教室) ポスター発表
14:30~15:05			ポスターは引き続き掲示
15:10~15:45			
15:50~16:25	ブース発表III (16:00~17:30) 池谷・鈴木 再考・学習目標の重要性 —プロジェクト学習を 手がかりに	ブース発表IV (16:00~17:30) 山下 純麗 文化パフォーマンスとしての 「ジョージ・タボーリ」ブーム	
16:30~17:05			
17:05~17:30			

18:00~20:00 懇 親 会 (学習交流プラザ)

10月4日(日) 10:00~13:15				
10月4日	A会場(111教室) シンポジウム IV	B会場(121教室) 口頭発表:文学III	C会場(131教室) 口頭発表:文学IV	D会場(211教室) 口頭発表:文化・社会
10:00~10:35	シンポジウム IV (10:00~13:00) チューリヒ劇場と 文化の政治	石井 亮治	片山由有子	北原 博
10:40~11:15		林 志津江	嶋崎 順子	野村 優子
11:20~11:55		Andreas Wistoff	益 敏郎	杉山 卓史
12:00~12:35		福間 具子	林 美哉	風場 浩平
12:35~13:10			仲井 幹也	辻 朋季
13:10~13:15	閉会の挨拶(A会場・111教室)			

10月4日(日) 10:00~13:15			
10月4日	E会場(125教室) ブース発表 V	F会場(124教室) ブース発表 VI	G会場(122教室) ポスター発表
10:00~10:35			ポスターは引き続き掲示
10:40~11:15			
11:20~11:55	ブース発表V (11:30~13:00) Marco Schulte Sprachlernspiele	ブース発表VI (11:30~13:00) 黒山 次郎 研究グループ試作プログラ ムによる電子的ドイツ語 イ ンデックスの紹介	
12:00~12:35			
12:35~13:10			
13:10~13:15	閉会の挨拶(A会場・111教室)		

目 次

第 1 日 10 月 3 日 (土)

シンポジウム I (10:00~13:00) A 会場 (111 教室)

旅と啓蒙

—近代黎明期のドイツ文学における旅の表象とその変遷

Reisen und Aufklärung

—Vorstellung und Bedeutung der Reise in der deutschen Literatur

von der frühen Aufklärung bis zur Goethezeit

司会：田口 武史・小林 英起子

1. クライストの『ミヒャエル・コールハース』と旅の啓蒙 市田 せつ子
2. カロリーネ・ノイバー座の旅と啓蒙
—北・中部ドイツにおける興行と『序幕』を例に 小林 英起子
3. J.H. カンペの旅行記 —啓蒙教育家は Volk をどう描いたか 田口 武史
4. ゲーテのロマンにおける旅と物語 木田 綾子
5. 「旅行文学」の解体 —初期ロマン派と文学のトポグラフィー
武田 利勝

口頭発表：文学 I (10:00~12:35) B 会場 (121 教室)

司会：山中 博心・平松 智久

1. ヴォルフラムの『パルチヴァール』における前史と後史 松原 文
2. 継承か歪曲か？—ディルタイによる 18 世紀小説像の理想化について
北原 寛子
3. リルケの詩にみられる関係性—所有ではなく連関 高木 靖恵
4. トーマス・マン作品における聴覚的描写の比喩的役割
—『魔の山』を中心に 坂本 彩希絵

口頭発表：ドイツ語教育・語学 I (10:00~11:55) C 会場 (131 教室)

司会：池内 宣夫・田畑 義之

1. 新聞制作を通じてドイツ語表現力を向上させる試み
—「書く」ことを目的とした「話す」こと 柴田 育子

2. 幼児期の発話にみられる心態詞 *doch* と *ja* の使い方に関する発達的变化
—心態詞と内的状態語の関係に着目して 牛山 さおり
3. 文学作品にみられる「日常語」の統語構造
—19世紀ドイツの文学作品に基づく言語意識史研究の試み 細川 裕史

ブース発表 I (11:30~13:00) E会場 (125 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

Tertiärsprache Deutsch in Japan:

Der Strategiegebrauch in Abhängigkeit der Fremdsprachenlernerfahrung

Diana Beier-Taguchi

ブース発表 II (11:30~13:00) F会場 (124 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

Anatomie から診た Benn と Celan 三ッ石 祐子・野口 方子・山口 康昭

ポスター発表 (13:00~14:30) G会場 (122 教室)

(ポスターは期間中を通じて掲出されています)

存在表現の地理的分布—ドイツ語圏スイスの事例を手がかりに 大喜 祐太

ルーブリック評価を導入したプロジェクト授業の実践例と課題
齊藤 公輔・田原 憲和

招待講演 (13:00~14:00) C会場 (131 教室)

Prof. Dr. Holger Helbig (Universität Rostock)

Vom Aufzählen zum Erzählen

Poetologie und Narration in Uwe Johnsons beiden ersten Romanen

シンポジウム II (14:30~17:30) A 会場 (111 教室)

Literarische Öffentlichkeit in der DDR

Moderator: Arne Klawitter

1. Samisdat als Öffentlichkeitsinsel. Autonome Zeitschriftenliteratur in der DDR
Arne Klawitter
2. Öffentlichkeitsinsel 'Ruhm'. Querelen um das Erscheinen von Brechts "Kriegsfibel" in der DDR
Thomas Pekar
3. Heiner Müller und sein „Nachwuchs“ des 21. Jahrhunderts
Ryoko Yotsuya
4. „Die Buchstaben tanzten mir vor den Augen wie Mückenschwärme“.
Zum gegenöffentlichen Chronotopos in Katja Lange-Müllers Roman „Die Letzten“
Hiroshi Yamamoto
5. Zur Musealisierung der DDR und ihrer Literatur
Holger Helbig

シンポジウム III (14:30~17:30) B 会場 (121 教室)

引き裂かれた「現在」—1830 年代の文学と政治

Die zerrissene "Gegenwart" – Literatur und Politik in den 1830er Jahren

司会：松村 朋彦

1. 〈予感と現在〉から〈過去と現在〉へ
—アイヒェンドルフの歴史的パースペクティヴ
須藤 秀平
2. 1835 年のスキャンダル —カール・グツコー
『懐疑的な女ヴァリー』におけるジェンダーと宗教
西尾 宇広
3. グラッベ『ナポレオンあるいは百日天下』における
政治的英雄への憧憬と不信
児玉 麻美
4. ヘッベルにおける「外圧」と「自由」
—大衆現象としてのナショナリズムの時代に
磯崎 康太郎

口頭発表：文学 II (14:30~17:05) C 会場 (131 教室)

司会：石川 栄作・尾張 充典

1. フランツ・カフカと初期映画 —『観察』における「連続性」の問題
森林 駿介
2. カフカの人間／身体像—ポストヒューマニズム的な萌芽
山尾 涼

3. ドイツ中世文学に登場する Halbwesen (妖なる人)
—そのグロテスクな身体について 渡邊 徳明
4. 「二重の代理人」フォルケール
—『ニーベルンゲンの歌』の詩人が楽人に仮託した役割 野内 清香

口頭発表：語学 II (14:30～17:05) D 会場 (211 教室)

司会：荻野 蔵平・恒川 元行

1. ドイツ語の歴史的現在と日本語の歴史的現在 嶋崎 啓
2. 「経験」と「知識」に基づく文法 田中 慎
3. 所在表現における動詞と情報構造の関係 岡部 亜美
4. ドイツ語と日本語の受動文——その基本的な違い 成田 節

ブース発表 III (16:00～17:30) E 会場 (125 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

再考・学習目標の重要性—プロジェクト学習を手がかりに

池谷 尚美・鈴木 智

ブース発表 IV (16:00～17:30) F 会場 (124 教室)

(ブース発表は途中での出入り自由です)

文化パフォーマンスとしての「ジョージ・タボーリ」ブーム

—1980年代～1990年代初頭の演劇批評をもとに受容の変化を検証する

山下 純照

第2日 10月4日(日)

シンポジウム IV (10:00~13:00) A 会場 (111 教室)

チューリヒ劇場と文化の政治

Das Schauspielhaus Zürich und Politik der Kultur

司会：葉柳 和則

1. 精神的国土防衛とチューリヒ劇場—フリッシュの言説を事例に 葉柳 和則
2. 演出家・ドラマトルクとしてのブレヒトとスイス
—1948年の二つの上演を中心に 市川 明
3. テル神話解体を試みるフリッシュのスイス像について 中村 靖子
4. 1940年代のデュレンマットの文学活動と精神的国土防衛 増本 浩子

口頭発表：文学 III (10:00~12:35) B 会場 (121 教室)

司会：杵渕 博樹・富重 純子

1. 言葉と沈黙—マックス・ピカートの思索を手掛かりに 石井 亮治
2. 記憶を回帰させる詩人の声／身体 —トーマス・クリングにおける
朗読とそのパフォーマンス性 林 志津江
3. Günter Grass – Die neue Kanonisierung des Werks Andreas Wistoff
4. ローベルト・シンデルの詩的言語
—〈第二世代〉の二重化する生とその表象 福間 具子

口頭発表：文学 IV (10:00~13:10) C 会場 (131 教室)

司会：中島 邦雄・塚 雅志

1. ハインリヒ・ゾイゼとマルガレータ・エーブナー：
能動性と受動性からみる神秘体験の比較 片山 由有子
2. 動かない空とイモムシの毛—ジャン・パウルのユートピア 嶋崎 順子
3. シラー美学の隠された政治性
—ポール・ド・マンとテリー・イーグルトンの論争から 益 敏郎
4. 「トロープのアレゴリーの永遠のパラバシス」
—Fr・シュレーゲルとポール・ド・マンにおけるイロニーの修辞学
林 英哉
5. ニーチェの同情批判論について 仲井 幹也

口頭発表：文化・社会（10:00～13:10）D会場（211教室）

司会：安岡正義・野口広明

1. 儀礼空間と庭園
ーモーツァルト『魔笛』の舞台イメージをめぐって 北原 博
2. 雑誌『白樺』および『現代の洋画』における
ユーリウス・マイアー＝グレーフェ受容 野村 優子
3. ヘルダーからリーグルへー触覚論の系譜の一断面 杉山 卓史
4. 『ブロックハウス事典用図鑑—第4部—今日の民族学』
(1849年)における「日本人」(Die Japaner)の項目 馬場 浩平
5. カール・フローレンツと上田萬年の「翻訳論争」(1895年)と
「その後」をめぐって 辻 朋季

ブース発表 V（11:30～13:00）E会場（125教室）

(ブース発表は途中での出入り自由です)

Sprachlernspiele – ein Unterrichtsmittel mit hohem pädagogischem Potenzial – Teil 3

Marco Schulze

ブース発表 VI（11:30～13:00）F会場（124教室）

(ブース発表は途中での出入り自由です)

研究グループ試作プログラムによる電子的ドイツ語インデックスの紹介

栗山 次郎

シンポジウム I (10:00~13:00) A 会場 (111 教室)

旅と啓蒙

—近代黎明期のドイツ文学における旅の表象とその変遷

Reisen und Aufklärung

—Vorstellung und Bedeutung der Reise in der deutschen Literatur

von der frühen Aufklärung bis zur Goethezeit

司会：田口 武史・小林 英起子

啓蒙主義時代から初期ロマン派の時代にかけて、ドイツでは旅の記録や旅をモチーフにした文学作品が飛躍的に増え、顕著な文化現象となった。これらをひもとき、個別具体的なテキスト・事例の解釈を通して当時の文学的・文化的状況を照射してみるのがシンポジウムの目的である。

英文学や仏文学と比べて、ドイツ文学では「旅と啓蒙」に焦点を合わせた研究がまだ少ないように見受けられる。そこでこのシンポジウムでは、英仏と異なるドイツの社会情勢を踏まえ、18世紀から19世紀初頭の文学テキストを旅の流行という文脈において分析し、その諸相を展望してゆく。すなわちドイツにおける旅と啓蒙思想の関係性、啓蒙活動としての旅、さらに比較対象として古典主義や初期ロマン派などの同時代の思潮における旅の表象を考察対象とし、旅行文学を通して見たドイツ近代黎明期の姿と、旅を記述するという行為がその時代に持っていた意味を立体的に浮かび上がらせたい。

1) ハインリヒ・フォン・クライスト (1777-1811) の小説『ミヒャエル・コールハース』からは、中世の迷信に満ちた旅とクライストの生きた啓蒙主義時代の旅との対比が読み取れる。シンポジウムの問題提起として、旅の技術的発展の一方で、啓蒙思想の旅の限界についても照射してみる。

2) 啓蒙演劇黎明期に活躍したカロリーネ・ノイバー (1697-1760) の劇団にとって、旅と啓蒙は本質的に一致していた。ノイバー座の旅巡業と啓蒙活動の姿を、王侯宛の書簡、北・中部ドイツでの興行記録、各地の宮廷劇場での客演と「序幕」や前口上から解き明かしたい。

3) 啓蒙教育家ヨアヒム・ハリンリヒ・カンペ (1746-1818) のハンブルクからスイスへの旅 (1786)、フランス革命直後のパリ視察 (1790)、パリからブラウンシュヴァイクへの帰途 (1804) に関する旅行記を研究対象とする。彼の Volk 像と国家観およびその変化について検証したい。

4) ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』や『親和力』等のロマンにおける旅や旅人の記述からゲーテの旅に関する思想を明らかにする。当時の旅と物語の関係を歴史的に検証しながら、時代の潮流に乗るにとどまらない

いゲーテ独自の思想を明らかにし、啓蒙主義の時代を距離を置いて振り返りたい。

5) 啓蒙主義期において推奨された旅行と、隆盛を見たジャンルとしての「旅行文学」では、記述対象と記述内容の一致が前提であったが、初期ロマン派ではその同一性が解体していく。シンポジウムの最後は、批判的・対蹠的視点から、ヒュルゼンの「スイス周遊旅行での自然観察」を主たる対象にして、F.シュレーゲルやテークの旅行記述への影響を指摘し、初期ロマン派の新しい空間経験の形式について論じたい。

発表全体で、芸術家や作家、思想家の遍歴や旅の経験に関する記述とその文化的意義、さらには旅行文学の表象と形式の変遷等について考察する。

1. クライストの『ミヒャエル・コールハース』と旅の啓蒙

市田 せつ子

クライストの『ミヒャエル・コールハース』には作品の時代である中世末期・近世に残る迷信に満ちた旅とクライストの生きた啓蒙主義の時代の旅の対比を見ることができる。この作品には主人公の近代的な商用の旅と恩赦の旅、護送の旅、狩猟と愛の旅が対比的に位置する。

『ミヒャエル・コールハース』で描かれる旅は啓蒙の進んだブランデンブルク国と中世以来の迷信に凝り固まったザクセン国の対比でもある。ブランデンブルクの臣民であったコールハースは啓蒙市民として旅人を守るべき法律の効力を追求して挫折、続いてルターのはからいで恩赦を得て「自由通行権」(freies Geleit)という中世的な旅の枠組みによってザクセンの首都ドレスデンに着き、最後は「ジプシー女」の霊的な力に導かれて処刑地ベルリンへ向かうが、この重苦しい護送の旅に宮廷一行の軽やかな歓楽の旅が交錯する。

この作品で係争の種となった一対の馬も旅の啓蒙を幻にする。イギリスで初めて鉄道が敷設される前には馬車馬を酷使することへの批判があったが、作品の中では酷使されてぼろぼろになった馬たちは、果たして同一の馬であるか怪しまれつつも元の元気な姿を取り戻して主人公の処刑場に現れる。啓蒙主義を支える有用性は道具の用途を限定して純粋な道具を出現させたが、ここでは道具が主人の手元を離れ、主人を呑み込むような事態となっている。

2. カロリーネ・ノイバー座の旅と啓蒙

—北・中部ドイツにおける興行と『序幕』を例に

本発表では 18 世紀前半の初期啓蒙主義の演劇における、特にカロリーネ・ノイバー座の旅の記録と啓蒙活動、脚本と背景にある啓蒙思想について論じる。ノイバー座の演劇活動は盛んな巡業に特徴がある。レーデン=エスベック著『カロリーネ・ノイバーと同時代人』(1881)や近年刊行されたノイバー夫人の著作集(1997)を先行研究として、本研究ではノイバー座が北部や中部ドイツの宮廷から得た興行特権状や、上演演目、『序幕』や興行の前口上を研究対象とする。

一座は本拠地ライプツィヒでの興行特権を失なうと、各地の王侯の誕生日に宮廷劇場で演じる機会を得ていった。一座の主な興行先が北・中部ドイツの宮廷劇場であったことは注目に値する。遺された『序幕』や祝辞には王侯の庇護に対する感謝が述べられている。これらはドイツ演劇でも啓蒙主義が上から下への動きであったことの証左である。ノイバー夫人は高い啓蒙の理想を掲げて文学の上演を手がけ、キール、リュウベック、ハンブルク、ブラウンシュヴァイク等各地の宮廷の支持を受けつつ、観客の心に響くように自らも喜劇の脚本執筆に情熱を注いだ。

大衆の支持を得られず、常設舞台の維持が困難になった時もあるが、俳優の地位向上や若手育成のための活動は矚目すべき成果である。ノイバー座の演劇改良の試みは俳優の福利厚生も含み、後の演劇人による俳優学校の先駆けである。

3. J.H.カンペの旅行記 —啓蒙教育家は Volk をどう描いたか

田口 武史

汎愛派の教育家 J.H.カンペ (1746-1818) の „Reise des Herausgebers von Hamburg bis in die Schweiz im Jahr 1785“ (1786/87) を対象に、彼の Volk 観を検討する。またこれを、1789 年 8 月以降のフランス情勢を伝えた „Brief aus Paris. Zur Zeit der Revolution geschrieben“ における Volk 像と照らし合わせることで、カンペの啓蒙思想と Volk との関係を動的にとらえる。

啓蒙家は多くの場合、啓蒙思想の普遍妥当性を証明し、それを説得的に提示する手段として旅行記を書いた。すなわち旅先で見聞した他者と異文化を比較材料にして、理想とする人間像や社会像を強いコントラストで浮かびあがらせようとしたのである。こうした特性は、未開と文明を対置させ、啓蒙の価値を説いたカンペの作品 „Robinson der Jüngere“ (1779) に関しても多く指摘されてきた。

これに対し、本発表で取り上げる彼の旅行記において Volk がいわば隣にある未開、異文化として、啓蒙された人々と対比的に描かれていることは見逃されが

ちである。Volk の啓蒙はフランス革命前後のドイツ啓蒙主義における中心的かつ焦眉の検討課題であり、カンペはまさにこの議論を先導した人物である。旅行記の中に描かれた Volk から、カンペの思想的核心が洞察されるであろう。

4. ゲーテのロマーンにおける旅と物語

木田 綾子

18 世紀におけるヨーロッパの知識人たちは好んで旅をし、これを記録した。旅の途上で収集された話や事件は、短い読み物としてカレンダーに挿入されることもあった。旅をする知識人が語り手もしくは記録者となり、旅をしない農民や女性が聞き手もしくは読み手となる。啓蒙時代の特徴の一つである。

ゲーテのロマーンには、そうした旅人がときおり登場し、話を語る。例えば、『親和力』に挿入されている「ノヴェレ」の語り手は、旅をするイギリスの貴族に随行する者である。『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』に収められている挿話のいくつかは、一つの読み物として独立して出版されてもいる。ゲーテのロマーンに登場する旅人の語るものは、農民や女性を対象とした読み物に好まれる教訓的な内容とは無縁である。

本発表がまず着目したのは、旅と物語の結びつきが啓蒙思想と密接に関係している点である。その上で、ゲーテのロマーンに描かれている旅や旅人に関する記述および旅人の語る話を分析することによって、『イタリア紀行』を著したゲーテ自身が、旅や旅人、旅人が報告したり記録したりすることをどのように考えていたのかを明らかにする。中でも、旅人が語る物語に啓蒙思想の片鱗もない点に着目したい。ここに、時代の潮流に乗るにとどまらない、旅に関するゲーテの思想があろう。

5. 「旅行文学」の解体 —初期ロマン派と文学のトポグラフィ—

武田 利勝

知識・情報の獲得、人格の陶冶、美的教養の向上に寄与しうる体験一般を、啓蒙主義は「有用性」の名のもとに称揚したが、とりわけ 18 世紀中葉以降、かかる有用な体験の場として推奨されたのが「旅」であった。旅の流行と旅行文学(旅記述)の隆盛は、言うまでもなく相関関係にあった。このとき記述内容の正当性は、記述対象との同一性によって保証される。この可能な限り客観的な同一性こそが有用にして理性的な旅記述の条件であった。

本報告はしかし、啓蒙時代を通じて形成されてきた文学の一ジャンルとしての「旅行文学／旅記述」が解体してゆく様を、A. L. ヒュルゼンが 1800 年——18 世紀最後の年——の『アテネウム』に発表した「スイス周遊旅行での自然観察」を例に見届ける。「旅行文学」の解体を告げ知らすこのテキストに対する、たとえば Fr.シュレーゲルによる評価はこうだ——「表題に〈スイス旅行〉など不要」、
「このテキストは旅のためではなく、テキスト自身のためにある」。現実の空間から一切の規定をうけない語りの視点は、高翔し、拡大し、浮遊する。テキストそのものが一つの動的な空間を立ち上げる——あるいは有用性から完全に離れ、言語そのものが無定形の「旅」を実践する (M. セルトー) ——こうした新たなトポグラフィの形式は、のちのティークやシュレーゲルの旅記述に決定的な影響を及ぼすこととなる。

口頭発表：文学 I (10:00~12:35) B 会場 (121 教室)

司会：山中 博心・平松 智久

1. ヴォルフラムの『パルチヴァール』における前史と後史

松原 文

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハは北仏のクレティアン・ド・トロワの『ペルスヴァール』を原典として『パルチヴァール』を書いた (13 世紀初頭)。原典との相違のなかで特に注目されるのは、新しく加えられた前史と後史、すなわち冒頭の父ガムレットの物語と、終結部の息子ロヘラングリーンの物語である。本発表は、ガムレットの最初の妻である黒人の女王ベラカーネと、ロヘラングリーンの妻ブラバント公妃に注目し、プロローグや minne-Exkurs とあわせ、作品の主題とされた「誠 (triuwe)」という概念の解釈を試みる。

ガムレットは誠のある美しい黒人の女王と結婚する。だが騎士の戦いを欲する彼は信仰の違いを理由に彼女を捨て、キリスト教世界に戻る。また、ロヘラングリーンは妻に聖杯城の掟を課し自分の素性に関する問いを禁ずる。彼女は人間的欲望を持たない善良な婦人であったが、愛ゆえにこの誓いを破ってしまい、彼は聖杯世界に戻っていく。『パルチヴァール』では正しい愛 (minne) とは真の誠 (triuwe) だと言われ、誠に支えられた男女の結婚の愛が高く評価されている。だが主人公の父も子も、宮廷や聖杯世界の論理に縛られ、外部世界の女性と triuwe の応答をすることができない。人間関係を支える善であるべき triuwe が、彼らの場合には反対に異世界を疎外する論理となっている。

ヴォルフラムは独自に本編の枠を創作し、キリスト教と異教、聖杯の不可思議

な世界と現実世界を接触させた。そこで、本編で実現されたはずの聖杯とアーサー一王世界の繁栄や調和には限界があることが示され、伝統的な宮廷物語の主題はより鋭く問題化されている。

2. 継承か歪曲か？ —ディルタイによる 18 世紀小説像の理想化について

北原 寛子

本発表は、**Bildungsroman** 概念の形成過程を考察する上で鍵となるディルタイの小説理論について考察するものである。従来の **Bildungsroman** 研究では、ディルタイの定義は議論の前提とされ、批判的に検討されることはなかった。それは彼がこの概念が広く使用されるきっかけを作ったとみなされているためであり、またゲーテやヘルダーリンといった 18 世紀の詩人たちの文学的活動と実際の人生を関連付けて記述したことが評価されてきたためである。しかしディルタイのテキストは、そのオリジナル性よりも、18 世紀以来の伝統から多くを受け継ぎつつも、議論を根本的に変更した点が重要なのである。小説における **Bildung**（登場人物に関して、あるいは読者への影響）は、それまで長期にわたり広く議論されていた課題であり、むしろ当時の一般的な小説理論の範囲内にある。これは彼が **Bildung** や **Entwicklung**, **Geschichte**, **Roman** などをさまざまに組み合わせ用いていることからもうかがい知ることができる。本当に画期的であったのは、ヘーゲルの『美学講義』の表現をわずかに書きかえることによって、それまで詩学で理論的に形成されてきた小説の特徴を、詩人の内面的な活動によって自発的に生じたと主張したことである。だが彼は先行する小説理論の伝統を意図的に歪曲したのではなく、「生の哲学」に沿って再発信したに過ぎない。ただしこの改変によって 18 世紀の小説理論は、詩学から精神史の領域に移し替えられることになるのであった。

3. リルケの詩にみられる関係性—所有ではなく連関

高木 靖恵

リルケは、マルテ執筆直後、創作の危機に陥った。数年後、当時の恋人である演奏家に宛てた手紙で、圧倒する風景に視覚の限界を感じたリルケは、「世界を受け取る」違う「器官」として音楽を挙げている。この音楽は、聴覚と結び付くと考えられるが、それ以後、「私」と周りの世界との交感が、陶酔の状態で描かれる詩が多くみられるようになった。『オルフォイス、オイリュディケ、ヘルメ

ス』の中期の詩での、振り返ろうとして妻を失い、視覚と結び付くオルフォイスとは異なり、オイリュディケは回帰する存在である。この『新詩集』で亡き妻を得る為視覚を信じようとした詩人は、『ソネット』では、ディオニュソスの巫女に引き裂かれ、このソネットが讃える、この世に存在しないものとしての「非在」の存在となっている。妻を失って所有を断念した絶望したオルフォイスは、分散してディオニュソスが体現する全体の存在と合一した存在となり、アポロの息子として、その神殿で歌を奏で、アポロ的要素を持つが、ディオニュソス的要素も持つとされている。

『ソネット』の冒頭で、夭折した踊り子がモデルとされる眠る少女は、この詩でオイリュディケの役割を担うと考えられる。生の矛盾を表し、音楽とも深く関わるディオニュソス的要素を、晩年の詩『銅鑼』でも参照しつつ、ニーチェ『悲劇の誕生』との関わりで、『ソネット』の考察を試みる。

4. トーマス・マン作品における聴覚的描写の比喩的役割

— 『魔の山』を中心に

坂本 彩希絵

トーマス・マンの作品には「聴覚性」への関心が顕著である。例えば、フリーデマンが斃れる最後の場面では、噴水の水音の印象的な描写があり（『小男フリーデマン氏』）、アシェンバハの夢に現れるオルギアの喧騒は、聴覚性の宝庫である（『ヴェニスに死す』）。このような関心は、差し当たり「深淵への共感」の表象と呼ぶのが簡明であろう。

『魔の山』においても、そのような表象は当然のことながら枚挙にいとまがない。しかもそれらはより前衛化して現れる。すなわち、この物語では、聴診器越しの肺音や、蓄音機の音楽とその機械音など、〈かつては聞こえなかった音〉が聴取されるのである。トーマス・マンの筆法を知る者は、このような新奇の音と音源の登場に、新しいものに敏感なこの作家の特性を容易に読み取るであろう。しかし、他方で、この音は既知の消失の合図でもある。蓄音機の雑音が楽曲の再生が終わって初めて知覚されるように、新しいもの、あるいは隠されていたものは、それまで前景にあったものが失われることによって顕現するのである。トーマス・マン作品における聴覚的描写と「深淵への共感」との表象関係は、『魔の山』においてその本質を一層あらわにする。聴取される音の新奇性ゆえに、それが実は既知の消失の合図であることが明解になる。「深淵への共感」とは、安住できる既知性からの逸脱なのである。

口頭発表：ドイツ語教育・語学 I (10:00~11:55) C会場 (131 教室)

司会：池内 宣夫・田畑 義之

1. 新聞制作を通じてドイツ語表現力を向上させる試み

—「書く」ことを目的とした「話す」こと

柴田 育子

「<書く>ことを<目的>とした話すこと」という表現は、奇異な感じを与えるかもしれない。ドイツ語で新聞記事を書くためには、当然のことながら、ドイツ語を<書く力>が必要だからである。

本研究発表者は、3年間にわたり、PASCH校ドイツ語新聞(JAPAN HEUTE)の編集と制作指導に携わってきた。記事執筆者は、ドイツ語学習歴1~2年、CEFR A1/A2レベルのドイツ語学習者たちである。彼らは、編集者(ドイツ語教員)と共に何度も原稿を校正し、自らのドイツ語力を向上させながら、記事を完成させていく。しかし、このレベルの学習者が、新聞記事を書くのは容易ではなく、発表者はこの3年間、「どうすればドイツ語を<書く力>を向上させることができるのか」について考え、その方法について試行錯誤を繰り返してきた。

通常のドイツ語の授業、プロジェクト授業、ドイツ研修での「ビデオ制作プロジェクト」など、さまざまな活動を通じてドイツ語を<書く力>を向上させる試みをしてきたが、その過程の中で、「会話スキットの作成と発表」、「ビデオプロジェクトのための原稿作成と出演」などの「書くこと→話すこと」の連携作業を通じて、ドイツ語表現力の向上を図る試みがとりわけ有効であった。

一方で、ドイツ語で新聞記事を書くことは難易度が高いため、制作活動を継続できない記事執筆者も少なくない。こうした外国語新聞制作の問題点についても、本発表において考察する。

2. 幼児期の発話にみられる心態詞 *doch* と *ja* の使い方に関する発達的变化

—心態詞と内的状態語の関係に着目して

牛山 さおり

本発表では、ドイツ語を母語とする幼児2名の発話コーパス分析を通して、幼児が使用する心態詞 *doch* と *ja* の用法が、月齢に沿ってどのように変化していくのかという問題を扱う。心態詞 *doch* および *ja* は、いずれも同音語としての用法である返答詞としての用法が1歳10ヶ月頃から現れ、動詞定形第2位が可能になる時期になってから、心態詞として文の中域に生じるということが先行研

究で明らかになっている。本研究ではその詳細を考察するため、統語構造の発達段階を Tracy (2008) に基づいて分析した結果、統語構造の発達段階と心態詞の獲得は並行関係にあることが判明した。

さらに2人の発話における心態詞 *doch* と *ja* の用法の意味変化を、月齢に沿って分析した。例えば心態詞 *ja* は、初出時期に「話し手である幼児と聞き手の間で知識や情報の共有」ができていない発話において用いられることもあったが、その後1年の間に、聞き手との間で「知識や情報の共有」を前提として使われるように変化していた。そこで発話データの中から、幼児の認知発達を推定するために用いられる「内的状態語」を抽出し、「思考・知識に関する表現 (*wissen, kennen, denken, glauben* など)」と心態詞の用法の関連を調べた。その結果、心態詞 *ja* と動詞 *wissen* の間に、統計的にも有意である相関が確認された。さらに他の内的状態語と心態詞 *doch* および *ja* の関係についても検討し、考察を行なう。

3. 文学作品にみられる「日常語」の統語構造

—19世紀ドイツの文学作品に基づく言語意識史研究の試み

細川 裕史

識字率の向上とともに「書きことば」が初めて幅広い社会層に広がった19世紀において、「話しことば」はどのようなものとして認識されていたのか。本発表では、19世紀後期の作家による作品を対象に、虚構の会話文の統計的な調査を行い、当時の日常的な「話しことば」がどのようなものとして描かれていたのかを明らかにする。

本発表で扱うのは、ドイツ統一後の1871年から19世紀末の代表的な作家の作品である。これらの作品から日常会話における発話として描写された文章を抽出してデジタル・コーパス化し、地の文と比較しながら、その統語構造の特徴を統計的に明らかにする。その際、Hosokawa (2014) で利用した「コンセプトとしての口語性」の指標を使用する。このことにより、これまで行われてきたような観察者の主観に基づく研究とは違い、客観的な「話しことば」の研究が可能になる。

その際とくに、先行研究において繰り返し「日常語」や「話しことば」の特徴として挙げられてきた文の長さおよび並列的構造に注目する。これらの特徴については、Auer (2002) などにおいて、口頭発話においても比較的長い文や従属的な構造が用いられていると指摘する反論が出てきている。本発表では、19世紀後期にすでにこうした認識が複数の作家に共通してみられるのか否かを明らかにし、「話しことば」に関する認識の普遍性を考察する。

ブース発表 I (11:30~13:00) E 会場 (125 教室)

Tertiärsprache Deutsch in Japan:

Der Strategiegebrauch in Abhängigkeit der Fremdsprachenlernerfahrung

Diana Beier-Taguchi

Im Rahmen einer Kabinenpräsentation soll meine Magisterarbeit mit dem Titel „Tertiärsprache Deutsch in Japan: Der Strategiegebrauch in Abhängigkeit der Fremdsprachenlernerfahrung. Eine empirische Studie mit japanischen Deutschlernenden“ aus dem Jahr 2008 vorgestellt werden.

In meiner Magisterarbeit konzentrierte ich mich auf die Untersuchung des Transfers der Sprachlernstrategien von der L2 (Englisch) auf die L3 (Deutsch). Dazu führte ich eine Umfrage (Umfragebögen zur Lernsituation (L2 und L3) und den *Strategy Inventory for Language Learning* (SILL) von Rebecca L. Oxford) mit 70 Studierenden der Waseda Universität und der Shinshu Universität durch.

Ziel der Umfrage war es, herauszufinden, ob Lernstrategien der L2 beim Lernen der L3 übertragen werden. Zudem wollte ich untersuchen, welche Strategien übertragen werden und ob diese Strategien eine Erleichterung beim Erlernen der L3 darstellen.

Nach einem kurzen Überblick über meine Magisterarbeit möchte ich den SILL kurz vorstellen, um meine Forschungsergebnisse verständlicher darstellen zu können. Die Teilnehmenden sollen selbst Strategien in verschiedene Komplexe einordnen und über deren Nutzen für japanische Lernende diskutieren. Im darauffolgenden Teil möchte ich meine Ergebnisse präsentieren und aufzeigen, welche Strategien und welche Komplexe für die Lernenden von Bedeutung sind. Im letzten Teil möchte ich mich mit den Teilnehmenden über die Wichtigkeit der Strategievermittlung im Deutschunterricht unterhalten.

ブース発表 II (11:30~13:00) F 会場 (124 教室)

Anatomie から診た Benn と Celan

三ッ石 祐子・野口 方子・山口 康昭

ドイツの現代抒情詩人を代表する Gottfried Benn (1886-1956)と Paul Celan

(1920-1970)であるが、両者の詩作に対する立場は、鮮やかに対照的である点に着目した。Celan のビュヒナー賞受賞講演『子午線』(1960年)が、Benn の詩論『抒情詩の問題』(1951年)に対する反論でもあったことは、その草稿や資料から確認できる。そして、両者の詩には身体名称や医学用語を含むものも少なくないが、詩作におけるそれらの語の扱いもまた対照的である。しかしながら、医学分野の専門用語を取り入れた詩にアプローチする上で、その言葉の持つイメージを理解するための研究はあまり見られないのが現状である。

そこで本発表では、まず身体名称や医学用語が使用されている両者の作品を、それぞれの詩作の立場から解釈する。具体的には、Benn においては、モルグの5編の詩を『現代の自我』、『創作の告白』などの1919年-1921年頃のエッセイを手がかりに読み解く。Celan においては、数編の詩(『数』『こめかみの鉗子』『頭蓋の思考』『昼の投擲』『沈み去れ』他)を『子午線』を手がかりに読み解き、非常に似たモチーフを二人の詩人がどのように扱い、その扱い方に両者の詩論的差異がどのように表れているかを考察する。そのうえで、医学的・解剖学的視点から両者の作品中に現れる用語の解釈を試みる。このような文学研究手法が、両者の作品理解にとってどれだけ新たな発見をもたらすか、そしてまた、ここから詩の翻訳に与える影響を、会場参加者との意見交換を通じ、共に検証する場としたい。

ポスター発表 (13:00~14:30) G 会場 (122 教室)

存在表現の地理的分布 — ドイツ語圏スイスの事例を手がかりに

大喜 祐太

本研究の目的は、方言研究の観点から、特にスイスドイツ語方言に焦点を当て、ドイツ語存在表現の地域的差異を調査することである。

Ammon *et al.* (2004) や熊坂 (2010) などでもすでに扱われているように、標準ドイツ語とスイスのドイツ語の間には、発音・語彙・統語的特徴などの点で多くの違いがあり、さらにスイスの中でも方言間によって多様性が見られる。Steiner (1921), Rush (1989, 2002), Christen *et al.* (2013) では、その要因の一つとしてフランス語などの周辺言語からの影響が指摘されている。たとえば、標準ドイツ語では「向かい側に」を意味する副詞 «gegenüber» が使用される状況で、スイスドイツ語では «vis-à-vis» (ex. S Hotel Schwiizerhof isch vis-à-vis vom HB Züri.) が多用されるが、この副詞がフランス語からの借用語であることは音声・形態の両面から明確である。それに対して、統語的特徴の場合、多くは翻訳借用となること、

さらに、文脈に依存してその機能が多様となることによって、発音や語彙に比べて、他言語の影響の有無についての判断が困難である。実地調査では、とりわけスイスの非人称存在表現に出現する「es hat 構文」(ex. häts no a Bierli bi dir?) などの基本動詞を中心とした統語的特徴について母語話者の許容度を調べた。

本発表のねらいは、存在表現の多様な語用論的機能を念頭に置きつつ、スイスドイツ語存在表現の地理的分布を議論することである。プレゼンテーションでは、グラフや言語地図を用いて、方言間の差異・他言語との言語接触の可能性などを視覚的に把握できる構成を目指す。

ルーブリック評価を導入したプロジェクト授業の実践例と課題

齊藤 公輔・田原 憲和

本発表では、プロジェクト授業の客観的評価の提案と、ルーブリックモデルの蓄積と充実への貢献を目的に、発表者が実際に直面した困難と解決法の模索を示しながら、主に①ルーブリックの各指標を設定する方策、②ルーブリック導入の際の準備、③授業実践の手順、④利点と課題の4点について、実践例を用いて解説する。

ルーブリックは学習者主体の学習を促すなどの利点に注目が集まりつつあるが、第二外国語の授業においてルーブリックを活かすためには、むしろそれ以外の準備が肝要である。この点を踏まえ本発表では、はじめに、プロジェクト授業のタスクをルーブリックの評価項目に落とし込む手段として、各学習項目を細分化する方策を示す。次に、ルーブリックを用いて評価することを前提とするプロジェクト授業について、授業案などを用いて手順や要点を解説する。最後に、ルーブリックの導入の効果や問題点について、学習者と教員の両面から検証する。その際、学習者アンケートの回答などを参考とする。これらを通して、ルーブリックがプロジェクト授業の評価のみならず、プロジェクト授業の導入としても有効であることを示す。

本発表の実践例は『外国語学習のめやす』を参考としていることから、必要に応じて『外国語学習のめやす』にも言及する。

シンポジウム II (14:30~17:30) A 会場 (111 教室)

Literarische Öffentlichkeit in der DDR

Moderator: Arne Klawitter

Die literarische Öffentlichkeit in der DDR war stark von Zensur und politischen Vorgaben geprägt. Dennoch gab es zahlreiche Möglichkeiten, sich an den politischen Leitlinien und der Zensur vorbei Gehör zu verschaffen und kleinere Öffentlichkeitsinseln zu bilden. So hat man einerseits auf frühere Formen der literarischen Öffentlichkeit zurückgegriffen, wie man sie aus dem 18. und 19. Jahrhundert kannte, so z.B. auf Tischgesellschaften, Salons und Kaffeehäuser, denn sie ermöglichten eine abgeschottete, private Sphäre permanenter offener und kritischer Diskussion, andererseits auf moderne Publikationsformen wie die sogen. Samisdat-Literatur, die sich bereits Ende des 19. Jh. in Russland herausgebildet hatte. Genauso wie die Institutionen bürgerlicher Öffentlichkeit beruhten diese Formen auf dem Prinzip der formalen Gleichheit der Mitglieder, wobei jegliche Hierarchien sozialer, politischer und wirtschaftlicher Art aufgehoben waren und auf eine staats-ideologische Sprache völlig verzichtet wurde. Dabei wurden Gegenstände verhandelt, die die politisch vorgegebenen Themenbereiche ergänzten und den offensichtlichen Diskussionsbedarf in Hinblick auf politische und künstlerischer Fragestellungen kompensierten. Doch im Gegensatz zur bürgerlichen Öffentlichkeit, die auf einer „prinzipiellen Unabgeschlossenheit des Publikums“ beruht, wie Habermas behauptet, sind die literarischen Zirkel der DDR zwar offen für jedermann, agieren aber insgesamt betrachtet in kleinen Kreisen. Deshalb sprechen wir auch von „Öffentlichkeitsinseln“ und sehen in Bachtins Chronotopos einen geeigneten Begriff, um diese Öffentlichkeitsinseln als funktionale Raum-Zeit-Konstellationen literaturwissenschaftlich zu fassen. Die geplanten Vorträge befassen sich mit unterschiedlichen Stationen und Konstellationen literarischer Öffentlichkeit in der DDR. So geht es z.B. um die Publikation und Verbreitung selbst verlegter und nicht systemkonformer Zeitschriften in der DDR. Anhand der um Jahre verzögerten Veröffentlichung der Kriegsfiabel, die Brecht 1949 erscheinen lassen wollte, was aber erst sechs Jahre später 1955 gelang, wird weiterhin deutlich gemacht, wie wichtig es der politischen Führung von Anfang an war, die literarische Öffentlichkeit zu kontrollieren und eine gelenkte Literaturpolitik zu organisieren. Schließlich werden die chronotopologischen Darstellungen und thematischen Besonderheiten in Werken von Heiner Müller und Lange-Müllers diskutiert. Der letzte Vortrag wird unter Einbeziehung

museumstheoretischer Fragestellungen die Gegenwartsliteratur im Verhältnis zum Museum thematisieren.

1. Samisdat als Öffentlichkeitsinsel. Autonome Zeitschriftenliteratur in der DDR

Arne Klawitter

Der aus dem Russischen stammende Begriff „Samisdat“ bedeutet soviel wie ‚Selbst-Herausgeber‘ und verweist damit auf die Publikation und Verbreitung alternativer, d.h. nicht systemkonformer Literatur in Osteuropa. Gleichzeitig steht dieser Begriff für eine Generation von Künstlern, die andere Ansichten vertraten als die kommunistischen Kulturverwalter und die alternativ handelten mit dem Ziel, den staatlichen Kulturbetrieb und die politische Zensur zu umgehen. In den 1980er Jahren wurden selbst verlegte Zeitschriften wie „Entwerter/Oder“ und „Anschlag“ zum Sammelbecken andersdenkender Schriftsteller, die in den offiziellen Literaturzeitschriften der DDR nicht gedruckt werden durften. Dabei konstituierten sie so etwas wie eine Gegenöffentlichkeit bzw. eine Art Öffentlichkeitsinsel. Der Vortrag stellt eine Reihe von selbst verlegten „Untergrund“-Zeitschriften der 1980er Jahre vor, darunter „Entwerter/Oder“ (seit 1982), „Anschlag“ (1984-88), „Mikado“ (1983-87), „Schaden“ (1984-87) sowie die „Ariadnefabrik“ (1986-89), und zeigt auf, wie in diesen Zeitschriften durch gezielte Verbindung von Form und Inhalt ein neues Ausdrucksformat geschaffen wurde. Am Beispiel der „Ariadnefabrik“ wird verdeutlicht, inwieweit Theorien des französischen Poststrukturalismus poetisch verarbeitet worden sind, womit das allgemeine Vorurteil widerlegt wird, dass es in der DDR keine Rezeption poststrukturalistischer Theorien gegeben habe. Darüber hinaus werden einige Beispiele sprachexperimenteller Lyrik aus den Samisdat-Zeitschriften präsentiert und analysiert.

2. Öffentlichkeitsinsel 'Ruhm'.

Querelen um das Erscheinen von Bertolt Brechts "Kriegsfibel" in der DDR

Thomas Pekar

Seit 1940 sammelte Brecht Pressefotos über den Krieg, die er Zeitschriften entnahm, und versah sie mit vierzeiligen Epigrammen, die die Bilder „zum Sprechen bringen“ sollten – und zwar meistens entgegen dem in den Zeitschriften damit

verbundenen heroisierenden oder illustrativen Sinn. Brecht nannte diese Verbindung von Text und Bild „Fotoepigramme“. Eine Sammlung von etwa 70 dieser Fotoepigramme stellte er, in Verbindung mit Ruth Berlau, Ende 1944 unter dem Titel *Kriegsfibel* zusammen. Damit nahm Brecht eine bislang wenig beachtete Tradition des „Gegen-den-Strich-Lesens“ von Kriegsfotos auf, die auf den österreichischen Schriftsteller Karl Kraus und den Antimilitaristen Ernst Friedrich zurückgeht. Brecht wollte seit 1950 seine *Kriegsfibel* in der DDR veröffentlichen, was von den DDR-Zensoren bis 1955 abgelehnt wurde, weil man die *Kriegsfibel* als pazifistisch und obszön ansah. Als Brecht Ende 1954 der sowjetische Stalin-Friedenspreis verliehen wurde, gab ihm die DDR-Führung die Druckgenehmigung für die *Kriegsfibel* „als Geschenk“ (wie es in einem offiziellen Brief an Brecht hieß). Beispielhaft zeigen die Querelen um die Druckgenehmigung der *Kriegsfibel* die Mechanismen der Zensur in der DDR und die Grenzen ihres Literatur- und Kunstverständnisses auf: Pazifismus und Obszönität wurden nicht geduldet. Nur Brechts einzigartige Stellung in der DDR, sein Ruhm, als anerkannter Regisseur des *Berliner Ensembles* und Stalinpreisträger, ermöglichte dann doch noch eine Publikation der *Kriegsfibel*, zudem Brecht letztendlich bereit war, eine Reihe von besonders beanstandeten Fotoepigrammen zu entfernen. Dieser Ruhm lässt sich als eine Öffentlichkeitsinsel verstehen, als ein besonderer Chronotopos, der eine singuläre öffentliche Positionierung erlaubte.

3. Heiner Müller und sein „Nachwuchs“ des 21. Jahrhunderts

Ryoko Yotsuya

In dem Referat wird versucht, die der Müllerschen Dramaturgie immanente „zeitliche – und örtliche Verschiebung“ herauszuarbeiten, die in der DDR sowohl bezüglich der Publikationsumstände als auch in Hinblick auf die Rezeptionsmöglichkeiten der Leser relevant waren. Dabei geht es vor allem um die in den 1980er Jahren von Müller selbst inszenierten Texte. Um seine Schreibweise in einen weiteren Zeitrahmen einzuordnen, werden folgende Fragen gestellt: 1) Gibt es in den letzten 15 Jahren Versuche neuer Analysen von Müllers Werken, auch in nicht deutschsprachigen Ländern? Welche Ansätze gibt es dabei? 2) Gibt es auch bei den theatralischen Inszenierungen neue, konkrete Tendenzen zu geschichtlichen Verweisen? Inwiefern hat dies mit der Einstellung von Theatermachern, Regisseuren und Schauspielern, deren Arbeit kein ‚echtes‘ Gedächtnis der damaligen DDR verkörpert, zu tun?

In diesem Kontext werden zunächst verschiedene heterotopische Motive in Müllers

Werken ausführlich betrachtet, z. B. ‚Sarg‘ und ‚Uhr‘ in *Hamletmaschine* (1977), ‚Aufzug‘ in *Der Auftrag* (1979) und ‚Schiff‘ und ‚Meer‘ in *Mediamaterial* (1982). Die Mehrdeutigkeit von Dingen werden hier als ‚Chiffren‘ dargestellt. Im Anschluss daran werden die wichtigsten Forschungsansätze zu Heiner Müller aus den vergangenen 15 Jahren kurz vorgestellt. Nach Müllers Tod, in den 1990er Jahren und noch bis etwa 2005 wurden seine Werke vorrangig im Kontext der ‚Wendeliteratur‘ verortet. Ich will untersuchen, ob die jüngere Generation diese ‚Tradition‘ übernimmt oder andere Zugänge zum Werk Müllers gefunden hat – auch mit Bezug auf zeitgenössische Geschichtsbilder.

4. ‚Die Buchstaben tanzten mir vor den Augen wie Mückenschwärme‘.

Zum gegenöffentlichen Chronotopos in Katja Lange-Müllers Roman ‚Die Letzten‘

Hiroshi Yamamoto

In den Chronotopoi der (Post-)DDR-Literatur nehmen Refugien für intellektuelle Außenseiter, wie z.B. das mecklenburgische Dorf (Christa Wolf: ‚Sommerstück‘), das Dresdener Villenviertel (Uwe Tellkamp: ‚Der Turm‘) oder die Ostseeinsel Hiddensee (Lutz Seiler: ‚Kruso‘), einen hohen Stellenwert ein. In diese Reihe dürfte wohl auch die Ostberliner Druckerei aus Katja Lange-Müllers erstem Roman ‚Die Letzten‘ gehören. Der autobiographisch gefärbte Roman aus dem Jahr 2000 ruft die private Druckerei aus den 1970er Jahren, ‚ein wahres Sammelbecken aufmüpfiger junger Intellektueller‘ (B. Dahlke), in die Erinnerung zurück. Darin spiegelt sich die eigene Erfahrung der Autorin wider, die vor ihrer Ausreise in den Westen im Jahr 1984 kurze Prosastücken in der selbstverlegten Literaturzeitschrift MIKADO veröffentlicht hatte. Im Roman ist zwar von vielfachen Verlusten die Rede – sowohl die Techniken der Setzer und Drucker als auch die sozialistischen Systeme sind inzwischen verschwunden –, doch verzichtet die Autorin ganz auf die in Mode gekommene Ostalgie. Stattdessen verbindet die Autorin ihre Erinnerungsarbeit mit sarkastischem Humor, um schließlich die Handlung auf eine sprachexperimentelle Pointe hin zuzuspitzen. In meinem Referat soll versucht werden, im Vergleich zu den anderen chronotopografischen Darstellungen in der (Post-)DDR-Literatur die Besonderheiten Lange-Müllers hervorzuheben. Dabei wird das Augenmerk vor allem auf die Stilmittel gelegt, mit denen sie ihre Erinnerungsarbeit ironisch gebrochen zur Darstellung bringt.

5. Zur Musealisierung der DDR und ihrer Literatur

Holger Helbig

Der Begriff DDR-Literatur verführt, ebenso wie die Rede vom Ostdeutschen, zu der Illusion, man wisse, wovon die Rede ist. Der Wert der Vokabel liegt im Ungefähren, die Diskussion der Kriterien und Merkmale ist nie abgerissen. Sie hat aber ein neues Stadium erreicht: Wenn man sich der Sache von heute aus nähern möchte, liegt der Weg ins/über das Museum nahe und die Einbeziehung museumstheoretischer Fragestellungen nahe. Die Häufung des Museums-Motivs in der deutschen Literatur 20 Jahre nach der Wende ist unverkennbar ein Ausdruck von Selbstreflexion innerhalb der Gegenwartsliteratur. Für die literaturgeschichtliche Interpretation liegt es daher nahe, das Bemühen um eine Ordnung im literarischen Material und ihre Kriterien mit dem Anspruch der Ausstellungsmacher zu vergleichen, die Exponate so anzuordnen, dass das Gezeigte eine Aussage bildet, wenn nicht gar eine Geschichte erzählt. Dieser Ansatz wird an einer Reihe von Texten der deutschen Gegenwartsliteratur erprobt, so bei Durs Grünbein, Hartmut Lange, Volker Braun, Uwe Kolbe und anderen.

シンポジウム III (14:30~17:30) B 会場 (121 教室)

引き裂かれた「現在」—1830 年代の文学と政治

Die zerrissene "Gegenwart" – Literatur und Politik in den 1830er Jahren

司会：松村 朋彦

1833 年の小品『さまざまな歴史観』のなかで、ハイネは「過去」志向の「歴史学派」（ロマン派やランケ）とも、「未来」志向の進歩史観とも異なる第三の歴史観として、「現在」に独自の価値と意義を見出す新たな立場を主張した。ハイネの没後に公表されたこのテキストは、たとえば同じ 30 年代に「青年ドイツ派」の作家たちが折に触れて「現在」という言葉を使用している事情からも、当時の時代感覚を表現した一種のカノン・テキストだったことが窺われる（Becker 1999; Eke 2005）。

もっとも、ここではそうした前二者の歴史観の担い手として、ほかならぬハイネの同時代人が想定されていること、さらに、ときにハイネ自身その二つの歴史観の代弁者ですらあったことから明らかな通り（Höhn 2004）、ここで前景化された「現在」とは決して一様なものではなく、そこには多分に〈分裂〉の契機が孕まれている。文学史的に見れば、1830 年代は「芸術時代の終焉」と

いうハイネの言葉（1831）やゲーテの死（1832）に象徴されるように、文学という営みの持つ重心が、「芸術の自律性」から同時代の社会や政治に積極的に介入する文筆活動へと移行する、一つの過渡期であり、また政治史的にも、それは復古体制と自由主義の命運が両天秤にかけられた、きわめて流動的な時代であった。七月革命（1830）やポーランドの十一月蜂起（1830/31）、自由主義陣営の集会として実に二万人規模の動員に成功したハンバッハ祭（1832）など、この十年は復古的な政府への抵抗の兆しとともに幕を開けたが、その一方で、青年ドイツ派に対する発禁措置（1835）をはじめ、とりわけF・ヴィルヘルム三世治下のプロイセンでは、検閲政策の徹底が図られ言論弾圧が強化される。こうした状況を一変させたのは、国王の息子F・ヴィルヘルム四世の即位（1840）であった。父の代の反動的政策に一定の軌道修正が施され、さらにライン危機の勃発（1840/41）によってナショナリズムの展開が本格化すると、革命に向けた前提条件が次第に整えられていく。その前段階にあたる30年代は、政治的・美学的レベルにおいて、まさに新旧の多様な価値観が特定の方向に収束する見通しのないままに交錯し、社会がさまざまな陣営に分断されていた時代の範例的な事例といえるだろう。

本シンポジウムは、『さまざまな歴史観』におけるハイネの時代認識を出発点とし、1830年代という限定された時間軸において幾人かの作家を共時的に捉え直すことで、当時の「現在」の〈複数性〉に光をあてる試みである。1848年を機に事後的に案出された言葉であるがゆえに、必然的に目的論的な含意を孕んでしまう「三月前期 Vormärz」（革命前の反動期、ないし、革命を準備した自由主義の萌芽期）という視角からではなく、当時の文学者たちの活動の総体を多様な可能性の同時的な競合として把握する作業を通じて、この時期の文学と政治の関係を捉えるための複眼的な視座を開拓すること、それがここでの課題となる。

1. 〈予感と現在〉から〈過去と現在〉へ

—アイヒェンドルフの歴史的パースペクティブ

須藤 秀平

ハイネは『ロマン派』の中で、対ナポレオン解放戦争の気風に由来するドイツ精神を体現した詩人の一人としてアイヒェンドルフを評価したが、1813年の精神性と結びついたドイツ観はアイヒェンドルフの晩年の文学史論にも通底している。一方でアイヒェンドルフは1815年の長編小説『予感と現在』で描いた詩人たちを1832年の風刺的小説『空騒ぎ』に再び登場させ、他の人物の目を通

じて彼らを過去の人物として描いている。ここには解放戦争当時の気風を 1830 年代という新たな時代の空気の中で相対化しようとする作者の意図がうかがえる。

本発表では、『空騒ぎ』に描かれる「現在」の像を『予感と現在』執筆当時の彼のドイツ観および歴史観と比較考察することによって、アイヒェンドルフの歴史的なパースペクティブを探る。文学の政治化が指摘される 1830 年代、彼は憲法制定に疑念を示すような論文を執筆し、さらには新設の検閲機関への登用を自ら求めた。こうした一見保守的な態度はしかし、当時の「現在」への批判を多分に含んでいる。ここではアイヒェンドルフの思想を同時代の政治的文脈の中で捉え直し、詩人としての彼が当時の社会問題とどのように取り組んだのかを考察する。とりわけドイツ民族統一の問題に関する彼の態度、また統一の紐帯となるはずの歴史についての彼の認識からは、リベラルか保守かというイデオロギー的二項対立図式では捉えきれない当時の政治意識の実情が浮き彫りにされる。

2. 1835 年のスキャンダル

—カール・グツコー『懐疑的な女ヴァリー』におけるジェンダーと宗教

西尾 宇広

七月革命以降、自由主義的気運の高まりを経験していたドイツ語圏の若い世代の作家たちにとって、「青年ドイツ派」の全面的な発禁処分が決定された 1835 年 12 月の連邦議会決議は、まさしく致命的な事件だった。青年ドイツ派を代表するカール・グツコーの小説『懐疑的な女ヴァリー』（1835）は、この決議に恰好の口実を与えた作品とされ、検閲体制と文学市場とによって枠づけられていた当時の作品受容の特異なあり方を示す、顕著な事例である。

カールスバート決議（1819）の事前検閲規定の抜け穴をつく形で発表されたこの小説は、出版後に各地で禁書扱いとなる一方、W・メンツェルをはじめ、作品を批判（ないし擁護）する夥しい数の論評が書かれるなど、巨大な「文学スキャンダル」を惹き起こした（Wabnegger 1987）。そこで争点となった「女性解放」と「宗教批判」という作品の二大主題は、当時の規範的価値観との偏差のみならず、F・シュレーゲルの『ルツィンデ』（1799）など（Lauster 2000）、いわゆる「芸術時代」の文学との連続性を示唆する符牒でもあり、その意味において、『ヴァリー』はまさしく 1830 年代の文学が置かれていた緊張の磁場を集約的に体現したテキストといえる。本発表では、テキストの内容と受容の両側面から、『ヴァリー』という文学的な出来事の意義を総体として検証することで、

当時の文学というメディアに潜在していた社会的・政治的な可能性、および、その限界の一端を明らかにしたい。

3. グラッベ『ナポレオンあるいは百日天下』における 政治的英雄への憧憬と不信

児玉 麻美

祖国愛描写、英雄崇拜と大衆蔑視、中央集権への志向と独裁的支配への批判などからその政治的態度を探ろうとするとき、日記、書簡、劇作品におけるグラッベの主張には一貫性が見られず、このことが「三月前期」における彼の位置づけを困難なものにしている。ナポレオン後の世界を「読み終えられた本」として捉えたグラッベはメランコリーにとらわれたが、彼の内的分裂状態は政治的ヒロイズムへの不信に起因すると考えられる。

偉大な過去と政治的英雄の喪失によりうまれた歴史の空隙を埋め合わせるため、グラッベは『ナポレオンあるいは百日天下』(1831)においてしばしば誇張や過剰演出を用いる。これにより理想と現実の差異がさらに際立ち、作品と作者自身の双方に緊張状態がもたらされていることはすでに指摘されているが(Maes 2014)、そもそもグラッベの描くナポレオンは単なる天才的行動者ではなく、征服者、詐欺師、道化めいた描写のうちに疑わしさをはらんでおり、ここには英雄そのものに対する根深い不信もまた読み取れる。

本発表では、グラッベと同時代の他作家たちのナポレオン受容とを比較しながら、＜国家の分裂性＞と＜個人の内面における分裂性＞が緊密に結びついている特殊な状況を明らかにし、ゲーテ時代からリアリズムへの＜過渡期＞あるいは＜転換期＞として位置づけられてきたこの時代の独自の性格を浮き上がらせることを目標とする。

4. ヘッベルにおける「外圧」と「自由」 —大衆現象としてのナショナリズムの時代に

磯崎 康太郎

対ナポレオン解放戦争後にドイツで流行現象となったナショナリズムは、1830年代に当時無名のヘッベルにも民族主義的政治詩を書かせ、作家として活動する契機を与えた。当時の政治詩は、彼の反体制的リベラリズムを明らかにするものと考えられてきた一方で、晩年のウィーン時代の彼は、初期の自由主

義者としての姿から保守派に転向したという通説が一般的である。(Martini 1978 等) これに対して本発表では、「大衆現象としてのナショナリズム」(Eke 2005) とヘッベルとの距離を探りながら、彼の政治性、すなわち外交的方略に注目し、彼の初期から晩年への変化に「転向」ではなく、連続性を求めることを目的とする。その際に、彼の文学作品における鎖や輪の形象にも着眼し、彼の文学に見られる変化も探っていく。ヘッベルは「青年ドイツ派」、「後期ロマン主義」、新たに勃興する「リアリズム」のいずれにも属さない作家として、「外圧」からの後ろ盾を持たず、しかしだからこそ「自由」に活動することができた作家でもあり、この点において、固定的な政治思想、例えば、祖国愛に囚われていた同時代のオーストリアの作家たちとは対照的であるとさえ言える。迫りくる「外圧」と、それを「自由」にすり抜けようとする彼の生涯と作品は、1830年代の「外圧」と作家との力学的関係が、その後いかに変化したのかという点についても示唆に富んでいるように思われる。

口頭発表：文学 II (14:30~17:05) C 会場 (131 教室)

司会：石川 栄作・尾張 充典

1. フランツ・カフカと初期映画

— 『観察』における「連続性」の問題

森林 駿介

プラハ出身の作家フランツ・カフカが 20 世紀初頭の黎明期の映画に親しんでいたことは、これまでもしばしば指摘されてきた。しかしながら、映画が彼の作品に与えた影響については、全く消極的なものとして捉えるか、あるいは彼の言語表現の本質に関わる重要な要素として捉えていくか、見解が分かれてきた。作品と映画との関連性を積極的に論じたこれまでの先行研究は、カフカの叙述の方法に映画からの影響を読み解いている。そこではとりわけカフカ作品における視覚の「連続性」が強調され、初期の短編集『観察』*Betrachtung* (1912) においてすでに、その連続して叙述される視覚的な運動描写に映画からの影響が指摘されている。しかし、カフカの叙述において、映画のような視覚的描写はその一要素をなすに過ぎない。『観察』においても、*Betrachtung* (「観察」あるいは「考察」という題が示すように、カフカの叙述の特徴はむしろ視覚的描写と抽象的思考との独自の結合にある。これまでの先行研究は、カフカと映画の関連性を強調するあまり、結果としてこうした彼の言語表現を視覚性の次元に還元してしまう傾向にある。

こうした点を踏まえ、本発表ではあくまでも映画を一つの参照軸とし、『観察』のテキスト分析を通じて、その叙述の文学的な特徴を考察する。そして、カフカが一方で映画からの影響を強く受けながらも、他方で単純な映画の模倣とは異なった独自の言語表現を発展させたことを論ずる。

2. カフカの人間／身体像

—ポストヒューマニズム的な萌芽

山尾 涼

20世紀から21世紀にかけて、テクノロジーによる身体へのさらなる介入や、世界と人間との関係の変遷により、従来のヒューマニズムの範疇に収まらないポストヒューマニズムが登場する。ポストヒューマニズムには大きく分けてふたつの概念があり、1. テクノロジーで人間を機械化し人体の限界を超えること、2. 従来のヒューマニズムをより上位の視点から捉えようとする事、つまりは人間と人間以外のものとの新しい統合や調和を希求する主義と定義できる。カフカの作品においてはヒューマニズムの正当性が瓦解していることはアドルノがすでに指摘しているが、たとえば『流刑地にて』（1914）などの短編小説は、現代的なバイオポリティクスの観点からも解釈が可能であるとノイマンが論じている。

カフカの短編小説である『流刑地にて』や、『猟師グラックス』（1917）などでは、まさしく政治やテクノロジーによる脱人間化の問題や、生がまったく別の生へと変容／移行していくという可能性、また身体のネガティブな可塑性の問題についてなど、ポストヒューマニズム的とも表現しうるようなテーマが扱われているといっても過言ではない。本発表の目的とは、20世紀初頭にカフカが洞察し、テキストへと描き出した人間の「かけがえのなさ」の喪失に対する許しがたさと、政治と身体、死の定義といったポストヒューマニズム的な問題の萌芽を、上述した2作品を中心に読み解くことにある。

3. ドイツ中世文学に登場する **Halbwesen** (妖なる人)

—そのグロテスクな身体について

渡邊 徳明

人間に類似しながら部分的に相違する存在“**Halbwesen**”(本発表ではそう呼ぶ)が中世文学作品で果たしている役割を問題とする。エリアーデの唱える神話的

世界において、人間の身体は神聖なる宇宙と重なる。その考えに依拠する妖怪・悪魔研究によるならば、“Halbwesen”は神に対置される不気味な世界観の存在を暗示する故に危険視されよう。ところで中世文学の主人公が“Halbwesen”として描かれることは稀である。神話的世界の中心として許容され難いからである。“Halbwesen”は主人公の周辺に姿を現すに過ぎない。それに対して近現代文学では、ときに主人公や語り手自身が“Halbwesen”と呼ばれうる。物語世界の中心にいる主人公が“Halbwesen”であるとき、それが神話的世界と呼べるならば、その世界全体は歪んでいると理解されよう。近現代文学におけるこのような変化の原因として、宗教的世界観の揺らぎの他、身体観の変化が挙げられるのではないか。エリアーデは聖と俗の意味論的違いに注目したが、それはベルクソンが意味づけされた人間の身体と意味づけされぬ無生の物とを区別したのと(すこし)似ている。有機的生命体である人間を、常に同一でありながら時間の流れの中で絶えず変化する意識的存在と意味づけるベルクソンは、『創造的進化』においてダーウィニズムを踏まえ、人間を他の生物種と比較し、結果的に両者の相違を相対化した。こうした思想は“Halbwesen”の存在自体を曖昧にする。それに対し近代より前の文学ではその存在は明白であろう。本発表では主に近現代文学作品との対比を通して中世文学作品における“Halbwesen”の役割・特色を明らかにする。

4. 「二重の代理人」フォルケール

— 『ニーベルンゲンの歌』の詩人が楽人に仮託した役割

野内 清香

中世の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の登場人物の一人である「楽人」アルツェイエのフォルケールは、作者の作中の代弁者であると同時に、トロネゲのハゲネの代理人であるという意味で、「二重の代理人」である。武人であり芸術家でもあるこの人物に、叙事詩の作者である詩人の自己投影を指摘することは、既に古くはホイスラーが1921年の『ニーベルンゲン伝説とニーベルンゲンの歌』で行っているように、伝統的かつ共通認識的な読み方である。従来それは匿名の詩人の正体を推測するために行われる傾向にあったが、この発表では、フォルケールの行動や描写それ自体を詳しく検討することにより、詩人の創作意図を明らかにしたい。フォルケールは1160年ごろの『古き災厄』の作者によってブルグンド族の悲劇を歌い上げるために追加されたキャラクターだと見られているが、ニーベルンゲン詩人もまたこれを利用し、フォルケールの言動を通じてハゲネをこの叙事詩の中で英雄として歌い上げようという自らの意志を表し

ている。またフォルケールは、荒々しい眼差しやフン族の国への経路の知識など、ハゲネを形成する要素の一部を共有し、暴力的な力強さでもって物語を進展させる。詩人は叙事詩前半の「獰猛なハゲネ」の像をフォルケールに引き取らせることで、後半の悲劇的展開の中でハゲネを異教的英雄として純化しようとするのである。

口頭発表：語学 II (14:30～17:05) D 会場 (211 教室)

司会：荻野 蔵平・恒川 元行

1. ドイツ語の歴史的現在と日本語の歴史的現在

嶋崎 啓

ドイツ語において過去形の語りの中で現在形が場面描写に用いられる場合、目の前で場面が展開されるような臨場感が表されると言われる。一方、日本語において過去形（タ形）の語りの中に差し挟まれる現在形（ル形）は臨場感を表さない。この日独語の違いは各言語の現在形の機能の違いによるのではなく、語りにおける現在形の用いられ方の違いにもとづく。すなわち、ドイツ語の現在形は、児童書の多くやジョークが現在形のみで語られることから分かるように、それ自体で語りの機能を持つ。一旦現在形が用いられるとしばしば現在形の文が連続して現れることも軌を一にする。それに対し日本語では、児童書を含め一般に、現在形と過去形が頻繁に交替して現れる。そうした現在形は登場人物の視点によって場面が描写される際に用いられることが多い。例えば、「花が咲いている」という歴史的現在の文は「太郎は花が咲いているのを見た」という文から主文を省略した文と見なされる。一方、ドイツ語の歴史的現在の文は他の文に対し独立しており、その使用の際にも語り手の視点が保持される。ただし、ドイツ語においても、初期新高ドイツ語の民衆本や、グリム童話の中の方言による話や、現代の話し言葉で用いられる歴史的現在は、過去形と頻繁に交替して現れる。こうした「民衆的な」歴史的現在は確かに日本語の歴史的現在に類似するが、日本語とは異なり、基本的に視点の移動がないことを主張したい。

2. 「経験」と「知識」に基づく文法

田中 慎

本発表では、言語には話し手の「経験」とその経験が集積された「知識」を表すしくみが言語横断的に存在することを示し、この「経験」と「知識」を軸とした言語の体系についての類型を提案したい。その上で、ドイツ語、日本語の各文法システムをこの類型に位置づける試みを行う。

スペイン語のコピュラ動詞には、一時的な状態を表す *estar* (*Está guapa*.彼女は(今)美しい) と恒常的な属性を示す *ser* (*Es guapa*.彼女は美しい) との二つの種類があることが知られているが、この現象は言語一般に広く観察される現象である。この区別は、「話し手の直接の経験(典型的には話し手の観察)に基づくもの」と「それを抽象化した知識に蓄えられているもの」との対立と見なすことができるだろう。本発表では、これらの違いを Tanaka(2011) で提案された「ダイクシスに基づく指示ストラテジー」と「アナファーに基づく指示ストラテジー」の区別と重ね合わせることにより、各言語においてどの側面がより強く構造化されているかについて考察を進めていきたい。

上記で触れた対立軸については、本発表の主題となる「経験」と「知識」の他にこれまでさまざまな提案がなされてきた(例えば、「主観」と「客観」、「*besprechen*」と「*erzählen*」など)。本発表では、これらの考え方を踏まえ、言語普遍性の一つのあり方(何が言語普遍的に観察され、個別言語的な異なりはどのような原則に従っているのか)を提示していきたい。

Tanaka, Shin (2011): *Deixis und Anaphorik: Referenzstrategien in Text, Satz und Wort*. Walter de Gruyter.

3. 所在表現における動詞と情報構造の関係

岡部 亜美

発表者は、地理的所在(建物や地形の所在)における所在動詞の選択に際して、情報構造が一つの要因であり得ることを示す。

ある物体を現実の物理空間に位置付ける表現を所在表現と呼ぶ。同表現においては、所在物の形状や性質、所在物と所在場所の関係に応じて複数の動詞が使い分けられていると言われている。しかし従来の研究は、決まった語順の単文(S-V-Loc.)を主な対象とし、語用論的な影響を排除しているという点で不十分なものである。これを踏まえ本発表は、これまで等閑視されてきた、所在動詞の選択における語用論的な要因を明らかにしようと試みた。発表者は、所在表現の中でも、所在物の姿勢が固定的な地理的所在を対象とし、この表現中で用いられる動詞の選択に焦点を当てた。そもそも地理的所在においては、所在物が動詞の種類を指定する場合がある。例えば、一目で把握しやすいものに対

しては *stehen* が、俯瞰しなくては全貌を把握しにくいものに対しては *liegen* が用いられやすい。これは、先行研究で、*stehen* は物体を三次元で捉えているとき、*liegen* は物体を二次元で（地点や面として）捉えているときに用いられる、と指摘されているのとは一致する傾向である。しかし、同様の状況に対して *stehen* や *liegen*、他に *sich befinden* 等、複数の動詞が用いられる可能性がある場合もある。発表者はこのような場合に、語用論的要因によって動詞が選択されることを、情報構造に関する分析を通して示す。

4. ドイツ語と日本語の受動文——その基本的な違い

成田 節

一般に受動文には、(A) 動作主ではなく被動者（あるいは行為そのもの）に 目を向けて 当該の出来事を捉える、(B) 動作主ではなく被動者 の立場から 当該の行為を捉える、という 2 つの異なった特徴付けが考えられる。(B) は「被影響」、つまり被動者が他者の行為による影響を感じているという話者の事態把握（川村大『ラル形述語文の研究』2012）と結び付くが、(A) は必ずしも「被影響」とは結び付かない。この発表では、ドイツ語の受動文（主として *werden* 受動文を扱う）には基本的に (A) が、日本語の固有の受動文（近代以前から日本語に存在し、現在でもごく自然な表現と見なされる受動文）には基本的に (B) が当てはまるということを示す。

ドイツ語と日本語の小説などから集めた実例の分析を通じて、(a) 受動文の主語が有情者（人）か非情物（物）か、(b) 受動文での被動者（＝主語）と動作主との視点関係（久野暲の「共感度」）、(c) 受動文における動作主表示の働き — 統語的な降格に伴い背景化された動作主か、述語の項として「主語が被る行為を行う行為者としての性質を積極的に持っている」（坪井栄治郎（2002）「受影性と受身」西村義樹編『認知言語学 I：事象構造』2002 所収）動作主か — (d) 自動詞を用いた受動文の表現機能、(e) 好んで受動態で表現される事態、などの点で有意な相違が見られることを示し、上述の主張の論拠とする。

ブース発表 III (16:00～17:30) E 会場 (125 教室)

再考・学習目標の重要性—プロジェクト学習を手がかりに

池谷 尚美・鈴木 智

本発表の目的は、ドイツ語教育における「学習目標」を問い直し、その重要性を再認識することである。現代のドイツ語授業においては、言語運用能力以外にも異文化への気づきやそれを尊重しようとする姿勢、さらには ICT 活用能力や創造性、協調性、自律性といった文化的・社会的能力も涵養されるべきである。発表者はこのような能力を育成する手段の一つとして、プロジェクト学習を実施してきた。その事例を手掛かりに学習目標と授業設計の関わりを主題とする。

近年、日本でもプロジェクト学習の事例紹介は増えつつある。しかし学習目標を中心に据えた先行研究はまだ不十分と言わざるを得ず、学習目標の軽視が危惧される。本来、学習目標は授業設計の主軸となり、明確かつ具体的に説明され、教師と学習者が共有すべきものではないだろうか。

そもそもなぜ、プロジェクト学習を実施するのか。プロジェクト学習では、言語運用能力以外にどのような能力が要求され、それは外国語学習にとってどのような意味を持つのか。何を評価対象とし、その評価はどのように実施されるのが望ましいのか。これらの問題提起をもとに、プロジェクト学習の実践例や、授業の反省点と改善案を発表し、改めて学習目標の重要性を喚起したい。さらには、時代の流れに即した言語的・文化的・社会的能力の総合的育成を視野に入れた学習目標および授業設計について意見交換し、今後の外国語授業の方向性を議論する。

ブース発表 IV (16:00~17:30) F 会場 (124 教室)

文化パフォーマンスとしての「ジョージ・タボーリ」ブーム

—1980 年代~1990 年代初頭の演劇批評をもとに受容の変化を検証する

山下 純照

戦後ドイツに「帰還した」ユダヤ系劇作家兼演出家という特殊な横顔をもつジョージ・タボーリは、1980 年前後からようやく連続的な成功を経て、最終的には人気の隆盛に至る。一連の作品（『わが母の肝っ玉』（1979）『記念日』（1983）『わが闘争』（1987）『ゴルトベルク変奏曲』（1991））を一つの焦点系とし、また代表的演劇雑誌 *Theater heute* の記事群をもう一つの焦点系として、それらの関係性の中に文化パフォーマンスとしてのタボーリ・ブームが生起したという仮説を提示する。

従来のタボーリ研究の大半は作品研究、それもホロコーストの記憶という主題をめぐる独特のドラマトウルギーの解釈に従事してきたか（ウーバーマン、

バイエルデルファー, シュトゥルユンペルら), さもなければ, 彼の演劇様式のポストモダン性を浮き彫りにするフォルマリスティッシュな読解を試みてきた(ハース)。これに対して演劇界によるタボーリ受容の問題を扱ったものは殆どない。グヴェッレロの「ドイツ語圏演劇批評にみるジョージ・タボーリ」(1999)が比較的まとまった先行研究であるが, 理論的な分析枠組みがない。

実は, タボーリの演劇がパフォーマンスであったばかりでなく, ドイツ語圏演劇界もまた, メディア空間の中でパフォーマンスにタボーリ評価の枠組みを形成した。これらの両面を統合する概念が問題である。本発表は, 近年の演劇学における文化パフォーマンスの概念を, タボーリ・ブームに適用しようとする試みである。ただし, 批評の点数はかなりの数にのぼるため今回は中間報告であることをお断りしたい。

シンポジウム IV (10:00~13:00) A 会場 (111 教室)

チューリヒ劇場と文化の政治

Das Schauspielhaus Zürich und Politik der Kultur

司会：葉柳 和則

ナチス・ドイツが政権の座にあった時代、ドイツ文学の伝統のかなりの部分は亡命作家たちによって継承されたこと、その重要な拠点のひとつがチューリヒ劇場であったことは、ドイツ文学史の一頁となっている。文学史のみならずスイスの歴史叙述においても、「亡命者たちにとって、チューリヒ劇場はドイツ語で自由に演じられる唯一の舞台となった」という出来事は、中立国スイスのナショナルな記憶の一部を成している。

しかし、ドイツ-スイス国境から約 30km しか離れていないチューリヒにおいて、ナチスによって焚書され、追放され、生命の危険にさらされた劇作家たちの作品を上演することはいかにして可能になったのか、戦中期のチューリヒ劇場の活動が戦後のドイツ語演劇ないしドイツ語文学にどのような影響を与えたのか、といった問いについては、定型的な答が用意されているか、あるいは限定的局面に光が当てられているにすぎない。

その理由のひとつは、ドイツ文学史においては、亡命先でのドイツ人芸術家の活動に焦点が当てられ、受け入れ側が置かれた状況が背景化しがちなことにある。概観的な文学史においてその傾向は顕著であるが、チューリヒ劇場を扱った研究書においてすらこの傾向が認められる。たとえば、Werner Mittenzwei が 1979 年に上梓した『チューリヒ劇場 1933-1945、あるいは最後のチャンス』は亡命芸術家たちのチューリヒ劇場での活動の叙述としては画期的な仕事であるが、受け入れ側の事情については書き割りのしにしか触れていない。もうひとつの理由は、戦後スイスの自己像をめぐるポリティクスにある。「自由と中立の砦」チューリヒ劇場をめぐる歴史叙述は、第二次世界大戦中のスイスとドイツとの関係、とりわけ、亡命者、亡命希望者に対するスイスの振る舞いから、まずもってスイス人自身が目をそらすための言説装置としてあったのである。

本シンポジウムは、上の問いに答えるための研究プロジェクト「20 世紀スイスの国民統合と文化の政治 — チューリヒ劇場をめぐる諸言説を手がかりに」(基盤研究(B) 25284063) の成果を公開の議論の場に供するために企画された。最初の問いに答えるためには、1930 年代から 40 年代のスイスの文化=政治状況の中でのチューリヒ劇場とそこに集った亡命芸術家たちの活動という二つの観点を整合的に結びつける必要がある。そのためには、スイス固有の文化運動「精神的国土防衛」を補助線にして、スイス国内におけるチューリヒ劇場における演

劇実践の文化=政治的意味を掘り起こす必要がある。第二の問いに答えるためには、「第二次大戦期のチューリヒ劇場とブレヒトからドラマトゥルギーを学んだ二人のスイス人劇作家、フリッシュとデュレンマツト」という、誤りではないにしろ、定型的な叙述の反復に陥りがちな二人の劇作家の活動の軌跡をチューリヒ劇場が置かれた文化=政治的な場の中に位置づけ直すことが重要となる。二人の主要戯曲はチューリヒ劇場で初演されているが、彼らとこの劇場の関係は必ずしも安定的なものでも、一義的なものでもなく、彼らの思想とドラマトゥルギーの展開と共に揺れ動いている。この動きを具体的に叙述することが、このシンポジウムの柱である。

1. 精神的国土防衛とチューリヒ劇場 —フリッシュの言説を事例に

葉柳 和則

チューリヒ劇場はナチス時代のドイツ語圏における「自由と中立の砦」だったというテーゼは広汎に受け入れられている。このテーゼが成り立つための条件を本報告では問う。事例として取り上げるのは、マックス・フリッシュとチューリヒ劇場との関係の変化である。ナチス時代のチューリヒ劇場の歴史は、1933年から1938年のリーザー時代と、1938年から1945年のヴェルターリン時代に区分できる。劇場とその社会-文化的環境との関係は大きな変化を見せる。主要な「変数」は、①ナチス・ドイツの文化政策、②スイスの政治的動向と文化政策、特に「スイス的なもの」を称揚する「精神的国土防衛」、③チューリヒ劇場の経営方針とその現れとしての演目構成、④個々の芸術家たちの思考と行動である。リーザー時代のチューリヒ劇場は、ユダヤ人と共産主義者の劇場とラベリングされ、精神的国土防衛にとって排除の対象であった。しかし、ヴェルターリン時代のチューリヒ劇場は、「スイス的なもの」を大地に根ざした農民的な民俗文化にではなく、「多様性の中の統一」という汎ヨーロッパ的理念の中に見いだすことで、精神的国土防衛と相補的な関係を作り出した。精神的国土防衛に棹さしていた1930年代のフリッシュが、1940年代以降、チューリヒ劇場の座付作家的な位置を獲得していくプロセスは、劇場とその環境との関係性の変化を端的に反映している。

2. 演出家・ドラマトゥルクとしてのブレヒトとスイス —1948年の二つの上演を中心に

市川 明

ブレヒトがスイスで深い関係を結んだ演劇人の多くはベルリンで1920年代に知り合った人たちで、ナチスの政権獲得後、20年代のベルリン演劇がそのままスイスに移ってきた感さえする。1933/34年、チューリヒ劇場は二つの人種劇(ブルックナーの『人種』, ヴォルフの『マンハイム教授』)で演劇史に残る新しい時代を切り開いた。こうした中で精神的国土防衛を主張する勢力からも、スイス演劇の独自性や演劇の革新を求める演劇人からも、**Los von Berlin!** が叫ばれた(Amrein 2004: «Los von Berlin!»)。「解放」の対象となったのはアジプロ演劇の影響を受けた作品であり、ブレヒトの異化的な演劇、モダニズムが彼を救うことになる。『肝っ玉おっ母とその子どもたち』などブレヒトの四作品が1940年代にチューリヒ劇場で世界初演されている。

1948年の『プンティラ旦那と下僕マッティ』上演でブレヒトは演出・ドラマトウルクを務めている。感情同化を排した演技法は俳優の共感を呼ばず、さまざまな誤解や確執を生んだ。同年、ブレヒトが演出を務めた新天地クールでの『アンティゴネ』上演と合わせ(Wüthrich 2015: *Die Antigone des Bertolt Brecht.*)、ブレヒトの叙事詩的演劇がどのように確立されたのかを明らかにする。

1930年代に『リンドバークたちの飛行』と『ルクルスの審問』がスイスでラジオ放送されている。映画『クーレ・ヴァンペ』の完全版も1936年にチューリヒで上映された。1930年代、40年代のブレヒトとスイスの関係を、演劇やラジオ放送などを通して包括的に探りたい。

3. テル神話解体を試みるフリッシュのスイス像について

中村 靖子

シラーの戯曲『ヴィルヘルム・テル』(1804年)は、ナチス・ドイツの歴史の中で、初期にはヒトラーやゲッベルスに愛好されながらも、のちには禁止されるという運命を辿った。1933年5月10日のナチスによる「焚書」事件の際、その二日前にゲッベルスはドイツ国内の劇場支配人たちを相手に「強制的画一化 Gleichschaltung」のための演説を行っており、その中でテルに言及している。テル・モチーフについては、ブレヒトがフリッシュに、「これを反動的な農民一揆として」「スイス人自身が書くべきである」と提言している。『シュティラー』(1954)以来フリッシュは一貫して、「近代法治国家であり安全で清潔な国」スイスという、スイス人の自国像に対する批判を展開しており、散文『学校のためのヴィルヘルム・テル』(1971年)においてもこうした自国像に安寧とするスイス人のメンタリティ(心性)を批判する。フリッシュはまた、「汝、偶像をつくる

なかれ」を主題とし続けたが、一連のスイス批判を通して、フリッシュ自身がスイス（人）に対する「偶像」（固定像）を作ってしまったのではないかという批判も生まれている。こうした状況を参照しつつ、本発表は、『学校のためのヴィルヘルム・テル』におけるフリッシュの「テル神話」解体の試みの意義を改めて明らかにすることを目的とする。

4. 1940年代のデュレンマットの文学活動と精神的国土防衛

増本 浩子

本報告では主に1940年代のデュレンマットの書簡や関係者の手記、晩年の自伝風散文『素材』（1980/1990）を参照しながら、デュレンマットが文学作品を書き始めた43年頃から47年に戯曲『聖書に曰く』でスキャンダラスなデビューを飾るまでの間、精神的国土防衛とデュレンマットの文学活動がどのような関係にあったかを考察する。

40年代のデュレンマットはベルン、チューリヒ、バーゼルで生活し、それぞれの都市がもつ特有の空気は作家活動を始めたばかりの彼の作風やドラマトゥルギーに大きな影響を与えた。ベルンは「父親」から受ける抑圧によって自由のない場所＝監獄であり、デュレンマットはこの町では問題児でしかなかった。ベルンで彼は、スイスという監獄に閉じ込められたスイス人である自分を迷宮という名の監獄に閉じ込められたミノタウロスになぞらえることによって、「迷宮のドラマトゥルギー」を生み出した。監獄としてのスイスという理解は、精神的国土防衛の排他的側面が前景化した結果と理解できる。

一方、チューリヒとバーゼルはデュレンマットにとってスイスでは最も自由な場所であり、実際にベルンでは無名だったデュレンマットはこれらの都市で初めて才能ある作家としてデビューすることが可能になった。スイス国内にこのような自由な都市が存在し得たということもまた精神的国土防衛の一面であり、それは多様性を認めることこそがスイス的なものであるという理解に基づいている。

口頭発表：文学 III（10:00～12:35）B会場（121教室）

司会：杵渕 博樹・富重 純子

1. 言葉と沈黙

—マックス・ピカートの思索を手掛かりに

マックス・ピカート (Max Picard, 1888-1965) は、19 世紀の後半から 20 世紀の中ごろにかけて、ドイツおよびスイスで著述活動を行った人物である。本発表では、ピカートの手掛けた著作群の中でも、とりわけ「言葉」と「沈黙」にまつわるものを中心に提起し、彼の言語観がいかなるものであったのかを考察していく。主な参照テキストは、*Die Welt des Schweigens*『沈黙の世界』(1948) と、*Wort und Wortgeräusch*『まこと言葉と騒音としての言葉』(1953) の二つである。

ピカートの著作は戦後わが国でも翻訳が紹介されたが、その際伝えられた彼の経歴や思想的背景はごく断片的なものだったため、「詩人」、「哲学者」、「信仰者」、「文明批評家」といった、様々な肩書きがピカートに与えられた。中でも「(カトリックの) 信仰者」という側面は、従来特に重視されてきたように思われる。確かにピカートは、神や信仰について繰り返し言及してはいる。だがその一方、ピカートがその活動の初期からやはり繰り返し言及してきた「言葉」や「沈黙」といった要素は、読解に際しては副次的なものと思われてきたきらいがある。その実、「人間の言葉は何よりもまず造物主への返答なのだ」という発言に象徴されるように、ピカートの思索はこうした要素が一体となつたうえで成り立っているのであって、彼の思索の全体像を明らかにするためには、信仰者としてのピカートのみならず、言葉に関わる人間としてのピカートの姿を把握することが重要なのである。

本発表では、ピカート自身の発言に加えて、彼の交友関係や知的関心の対象も踏まえたうえで論を進めていく。

2. 記憶を回帰させる詩人の声／身体

— トーマス・クリングにおける朗読とそのパフォーマンス性

林 志津江

ドイツ語詩人トーマス・クリング(1957-2005)は、表現形式としての朗読を通じ、言語における口頭性を追究したことで知られるとともに、言語における声と文字の歴史的関係性、すなわち声から文字への歴史的移行という現象に注目した。その際の詩人の関心とは、言語における「声」から「文字」への歴史的移行がきわめて大きな心理的・社会的発展とともに成し遂げられたこと、及びそのダイナミズムにあったと考えられる。またクリングは自らが牽引役となつた 1980 年代ドイツ詩壇を振り返り、その時代が口頭性という西欧詩の一大伝統に回帰していたとも述べる。クリングは詩や朗読に関する理論的考察を欠いた総称概念と

しての「パフォーマンス」と、自身の朗読／文芸行為を厳密に区別する意図で「言語インスタレーション (Sprachinstallation)」と命名するとともに、民俗学の知見、ニーチェやマラルメ、ビートニク詩やドイツ語圏のポップ文学といった現象を引き合いにしつつ、集団的記憶を司る「記憶者 (Memorizer)」としての詩人、記憶が回帰する場としての歌う人＝詩人というテーゼを打ち出している。またその際、詩人の「声」とは観念的なものではなく、徹底的に身体を意識した行為であることも強調される。本発表では、朗読が声／身体を回帰させる場かつ行為であり、朗読を通じて詩人本人が記憶を回帰させる身体／装置となるというクリングによるテーゼの検証を、詩人の (文字) テキストや具体的な作品分析から試みる。

3. Günter Grass – Die neue Kanonisierung des Werks

Andreas Wistoff

Der Tod von Günter Grass im April 2015 war Anlass für zahlreiche Reaktionen in der literarischen Öffentlichkeit Deutschlands. In diesen Wochen schreiben die deutschsprachigen Medien das öffentliche Bild dieses Schriftstellers fest, sie kanonisieren Teile des Werks, wobei andere, erhebliche Teile übergangen werden. Bemerkenswert sind 1. die positive Würdigung des Gesamtwerks, während Einzelwerke mitunter heftige Tadel erfahren; 2. die positive Umwertung des Frühwerks und dessen Kanonisierung als Schwerpunkt des gesamten künstlerischen Schaffens; 3. die Verbindung von literarischem Werk und öffentlichem Auftreten ("moralisches Gewissen Deutschlands"); das Ignorieren bestimmter Werke, die literaturwissenschaftlich besonders beachtet werden; 5. das Heranziehen außerliterarischer Kriterien für die Beurteilung der schriftstellerischen Leistung.

Die große literaturkritische Resonanz auf Grass' Tod in den Medien bietet eine günstige Gelegenheit, Merkmale und Methoden der Kanonbildung zu erfassen. Dabei spielen literarische und erst recht literaturwissenschaftliche Kriterien eine erstaunlich nebensächliche Rolle.

Günter Grass hat in den letzten Jahrzehnten eine größere öffentliche Resonanz erfahren als alle anderen deutschsprachigen Autoren. In Nachrufen wird er auf eine Stufe mit Goethe und Thomas Mann gestellt. Die herausragende literaturwissenschaftliche und öffentliche Stellung des Werks verdient eine eingehende Untersuchung in rezeptionsphilologischer Hinsicht, weil in den aktuellen Einschätzungen die Impulse Grass' für die Literaturgeschichte des 20. Jahrhunderts festgeschrieben werden.

4. ローベルト・シンデルの詩的言語—〈第二世代〉の二重化する生とその表象

福間 具子

ローベルト・シンデル (1944 -) は、長編小説『生まれ』(1992) の成功によって文壇に存在感を示すようになったが、実際には創作活動を開始して以来、一貫して自らを詩人と規定し、パウル・ツェラーンを内的対話者とする難解な詩作品を生み出し続けてきた。彼はショアアの犠牲者や生き残りを親に持ついわゆる〈第二世代〉に属する。この世代の自己意識は育った環境により多岐にわたるが、シンデルの場合、長い間その出自を顧みることなくウィーンを故郷として暮らしてきた一方で、非ユダヤ人の側からは異質な他者と見なされるという、二重化する生が常に根底にあったと言える。彼は70年代後半にある出来事によって決定的な「自己疎外」に陥った結果、初めて自らのルーツに向き合い、以後政治的行動主義を捨てもっぱら言語表現の中で自己のアイデンティティを模索するようになる。

本発表では、意味決定を困難にする独特の言葉遣いによってこれまで十全に解明されずにきた彼の詩作品を、80年代後半～90年代の作品を中心に、ドイツ語圏で成熟しつつあるシンデル詩学研究の成果を援用しながら分析する。彼は空洞化した自己を意識的に民族迫害の記憶やいまだ反ユダヤ主義が根深いオーストリア社会と対置させ、その間に生じる緊張関係を—半ば冷静に、半ば苦痛を伴いつつ—凝視し、最終的にはそれらを詩的表象を通じて解放しようと試みる。ツェラーンへのシンデルの応答も指摘しつつ、二重化する生の表象を辿る。

口頭発表：文学 IV (10:00～13:10) C会場 (131教室)

司会：中島 邦雄・堺 雅志

1. ハインリヒ・ゾイゼとマルガレータ・エーブナー：

能動性と受動性からみる神秘体験の比較

片山 由有子

14世紀のドミニコ会修道女マルガレータ・エーブナーとドイツ神秘思想を代表するハインリヒ・ゾイゼは両者ともシュヴァーベン＝アレマン地域で敬虔な宗教生活を送った同世代人であり、彼らはマルガレータの聴罪司祭を通して関わりがあった。ハインリヒ・ゾイゼは自伝『ゾイゼの生涯』のなかで、マルガレ

ータ・エーブナーは自身の体験を書き記した『啓示』のなかで、それぞれ神秘的な生活についてのドキュメントを残している。マルガレータの神秘的な生活は、キリスト教会暦、時課、典礼に則るもので、彼女は教会暦や時課に従って神の恩寵と人間イエスの一生を体験する。それに対してゾイゼは、痛ましい苦行のなかで、自身の身体のみならず、修道院という空間を使ってイエスの模倣を展開する。彼は修道院のなかを歩くことのうちに、次々にイエスの十字架への道の段階を体験し、それを再演する。これらのことから、彼らの神秘体験は、マルガレータにおいては「時間的」かつ「受動的」に、ゾイゼにおいては「空間的」かつ「能動的」に構築されているといえる。しばしば言われるような、中世の女性神秘家を「受動的」と一括りにすることへの否定的評価はここではあたらぬ。なぜならばマルガレータが示すのは神から恩寵を与えられることにおけるのみ果たされる霊的完成とそれに向かう努力であり、彼女の神秘体験における受動性はむしろ「能動的受動性」ともいえるものだからである。

2. 動かない空とイモムシの毛 —ジャン・パウルのユートピア

嶋崎 順子

ジャン・パウルは、約九年にわたって諷刺の執筆に専念したのち、1791年春から翌年の春にかけて執筆され、1793年に出版された最初の長篇小説『見えないロッジ』によって小説家へと転じる。彼はこの作品において、すでに諷刺において使用していた比喩的文体を抒情的・感情的な領域にまで広げ、独自の小説文体を確立した。本発表は、『見えないロッジ』の比喩表現、とりわけ自然描写の具体的考察を通じて、彼の文体を支える中心的原理が、事物間の類似に基づく「隠喩（メタファー）」ではなく、全体と部分の関係に基づく「換喩（メトニミー）」であることを明らかにする。

ジャン・パウルにおける「換喩」の優勢が示すのは、彼の身体・現実・個物への強い愛着である。こうした傾向は、彼に大きな影響を与えたクロップシュトックやゲーテにおける類似した表現と比較するとき、さらに鮮明なものとなる。ジャン・パウルのまなざしが向けられているのは、創造神の造化の妙や世界の秩序・調和ではなく、「いま、ここ」に存在する個物が放つ生命の輝きである。換喩表現によって生じる全体と部分の価値の転倒と、それによって生じる秩序の攪乱は、この個物への関心と密接に関連している。

「隠喩」を議論の中心に置く従来のジャン・パウル研究は、ジャン・パウルにおける「換喩」の重要性を見落としてきた。本研究はこの欠落を埋め、「換喩」に支えられた彼の文体の特徴およびその背後にある彼の文学的姿勢の本質を浮

き彫りにすることを目指す。

3. シラー美学の隠された政治性

—ポール・ド・マンとテリー・イーグルトンの論争から

益 敏郎

フリードリヒ・シラーの美学は、美とフマニテートの理想を高らかに謳い、同時に、退廃した社会に対して政治的変革を強く主張する思想である。そのため先行研究には、シラー美学の政治性に言及するものが一定数存在する。その中心はシラーの思想をホッブズ、ルソーなどの近代政治思想の系譜に位置付けるものや、そこにフランス革命やドイツ社会への批判を読み取るものなどである。

本発表では、上記とは異なる政治性に照準を定める。参照軸となるのは、ポール・ド・マンとテリー・イーグルトンによるシラー論である。シラー美学を強く批判するド・マンと、多角的な分析によって好意的に評価するイーグルトンの論は鋭く対立しているが、その背景には脱構築批評とマルクス主義批評という思想・方法論上の対抗関係がある。しかしその争点を整理していくと、ある共通する姿勢が明らかになる。それは美・芸術を通じて人間・社会を融和へ導くというシラー美学の構想に、一見するところ表面化しないイデオロギー的な政治性を読み込んでいく、という姿勢である。

本発表では、シラーの『人間の美的教育について』（1795年）における国家論を俎上に載せ、ド・マンとイーグルトンによる高度に思想的な解釈の妥当性を検証する。それを通じて、文学研究では注目されることの多くない、美的融和構想の政治性に光を当てたい。この美的融和構想はヘーゲル、シェリング、F・シュレーゲルらの「新しい神話」構想やヘルダーリンの新『美的書簡』構想に引き継がれていく。副次的な成果として本発表は、18世紀末の芸術思想に対する特異な視座の可能性を示唆するだろう。

4. 「トロープのアレゴリーの永遠のパラバシス」

—Fr・シュレーゲルとポール・ド・マンにおけるイロニーの修辞学

林 英哉

ポール・ド・マンは『イロニーの概念』（1977）において、イロニーの定義は困難であるとしつつも、それを「トロープのアレゴリーの永遠のパラバシス（パレクバーゼ）」と定義した。「永遠のパレクバーゼ」とは、近代において初めてイ

ロニーを理論化したとも言える Fr・シュレーゲルからの引用である。「パレクバーゼ」は、古代ギリシア喜劇において筋に突然割り込んでくるコロスを指す用語であるが、その「突然の中断」があらゆる時点で生起しうるため「永遠」であるとド・マンは解釈する。しかし、ド・マンはそれに「トロープのアレゴリーの (of the allegory of tropes)」を付け加えた。これは具体的には、フィヒテが記述したような、譬喩（トロープ）としての認識論的体系を指す。この体系的「物語」の中断が、シュレーゲルにとってのイロニーであるとド・マンは考える。しかし、体系を中断させたところで、結局はその中断が認識のうちに取り込まれ、「中断の物語」として再度体系化されることになるだろう。この動的プロセスは、終息することなく「永遠」に起こり続ける。これは固定化・沈静化としての定義づけとはなじまない。イロニーは言表行為における技法の一つでもあり、恣意的に用いようとすることはできる。しかし、用いたつもりでも発動しないこともある。意図せず発動してしまうこともある。この制御可能性と不可能性の間の緊張状態こそ、ド・マンにとって修辞学的用語が意味するものに他ならない。

5. ニーチェの同情批判論について

仲井 幹也

ニーチェの同情（共苦）批判論は、彼の奴隷道徳批判の一部をなすものであるが、ニーチェのオリジナルということではない。「同情・憐れみ」の理解はアリストテレスの『詩学』『弁論術』に由来し、後のストア派のアパテイア（平静・無感動）を介してソクラテスの自足的道徳観にもさかのぼるヨーロッパの知的伝統に根差している。同情批判はさらにモンテーニュやスピノザにも受け継がれ、アドルノも『啓蒙の弁証法』で、ほぼこの伝統的立場に立ってニーチェの同情批判を論じている。現代社会で賞揚される同情や隣人への共感という道徳観は、キリスト教に発するものであるが、思想的には18世紀イギリスの道徳哲学やショーペンハウアーが主流をなすものである。ニーチェの同情批判に接した場合、まずおそらく多くの者が著しい違和感を覚えるほどまでに、この同情の道徳は今日の社会に浸透している。とはいえ同情の道徳は永遠の真理などではなく、ニーチェ自身が述べているように、時を得た流行でしかない。同情批判と同情賛美の立場の違いは、前者が生を強化する原理に向かうのに対して、後者が快・不快の原理に基づく点にある。前者が自然法則を根拠とするのに対し、後者は人為的機制でしかないものに普遍性の相貌をまとうせる。現代社会が「人間性」と称するものに真っ向から対立するニーチェの同情批判は、アドルノが述べたように、むしろ「ゆるがぬ人間への信頼」を証示しているのである。

口頭発表：文化・社会（10:00～13:10）D会場（211教室）

司会：安岡 正義・野口 広明

1. 儀礼空間と庭園

—モーツァルト『魔笛』の舞台イメージをめぐって

北原 博

ザルツブルク近郊にあるアイゲンの庭園の洞窟はイルミナーティの洞窟とも呼ばれ、19世紀の銅版画に描かれた滝の風景とも相まって、『魔笛』の火と水の試練の舞台を連想させる。しかも、Koch(1911)はアイゲンの庭園に言及し、モーツァルトとザルツブルクのイルミナーティとを明確に関連づけており、同研究を論拠に近年のいくつかの研究においてもアイゲンの庭園がモーツァルトにインスピレーションを与えたとされている。しかし Koch の研究には問題も多く、アイゲンの庭園の歴史を詳細に調査した Harlander (2003)の研究成果とも矛盾している。Koch はモーツァルトと秘密結社との関係を論ずる際にしばしば言及される文献であり、そこで述べられている事実関係の疑義を明らかにすることは、18世紀秘密結社の研究に寄与するものである。そこで本発表では Koch が典拠としている文献へとさかのぼってモーツァルトとザルツブルクの結社との関連づけには留保が必要であることを明らかにしたい。とはいえ、『魔笛』の舞台演出と当時の英国風風景庭園の相互影響は明らかである。廃墟やピラミッドは当時の庭園に見られる施設であり、庭園とジングシュピールの舞台には共通のイメージが認められる。庭園におけるフリーメイソンの要素がしばしば恣意的に解釈されていることに注意しつつ、当時の古代儀礼への関心からエジプト趣味への移り変わりの要素も含めて考察したい。

2. 雑誌『白樺』および『現代の洋画』における

ユーリウス・マイアー＝グレーフェ受容

野村 優子

明治末期の日本でポスト印象主義の画風を受容したのは、1912年に結成されたフェウザン会の画家たちとされる。この会を代表する岸田劉生、木村荘八らは、1910年創刊の雑誌『白樺』が掲載したポスト印象主義の記事や図版に刺激を受けて自らの画風を大きく変え、さらには雑誌『現代の洋画』に寄稿することで、

ポスト印象主義の絵画を世に知らしめた。それ以前の印象主義が、パリで画風を習得した画家たちにより直接日本へと伝えられたのに対し、ポスト印象主義は、日本にいながら西洋関連書物を研究した文筆家たちの美術批評を媒介として間接的に受容されたことを特徴としている。当時の美術批評が日本のポスト印象主義受容に決定的な役割を果たしたことは自明のこととされながら、その批評自体に焦点を当て、典拠とした原書と比較検討したうえで受容の実像に迫った研究は今のところ見られない。本発表では、『白樺』『現代の洋画』に掲載されたポスト印象主義批評の多くがドイツ語の文献、とりわけユーリウス・マイアー＝グレーフェの『近代芸術発展史』に依拠していることを証明し、フランス美術一辺倒で語られがちな日本の西洋美術受容に、ドイツ美術批評受容という新たな要素を加え、日本のポスト印象主義受容は、絵画面での受容と美術批評面での受容が重なり合いながら成立しているのだということを主張したい。

3. ヘルダーからリーグルへ —触覚論の系譜の一断面

杉山 卓史

前世紀初頭、美術史ウィーン学派の祖リーグルは『末期ローマの美術工芸』（1901年）において、奥行き変化を示す輪郭とりわけ影のような三次元的要素のない「触覚的」事物把握＝「近接視」を特徴とする古代エジプト美術という第一段階から、影が生まれるが部分相互の触覚的連関を保持する「触覚的 - 視覚的」事物把握＝「通常視」のギリシア古典美術という第二段階を経て、個々の部分が深い影によって触覚的連関を断たれる「視覚的」事物把握＝「遠隔視」の末期ローマ帝政期美術という第三段階に至る、という古代美術の発展図式（＝「芸術意思」）を提示した。この図式とりわけその独自の「触視的(haptisch)」概念は、単に美術史学の方法論的基礎づけにとどまらず、ベンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』（1936年）やドゥルーズ・ガタリの『千のプラト—』（1980年）など、20世紀の思想にも大きな影響を及ぼした。

では、この図式はどこに由来するのだろうか。リーグルを独自の思想家としてではなく実務的な美術史家・記念物保護官としてのみ捉えてきた従来言説において、この問いが深く考察されることは稀であった。本発表は、リーグルが『末期ローマの美術工芸』において〈触覚 - 視覚〉の対概念を導入するに際して、新カント派の哲学者ジーゲルの『空間表象の発展』（1899年）に唯一の先行研究として言及していること、このジーゲルが後に『哲学者としてのヘルダー』（1907年）という書を著していることを手がかりに、ヘルダーからリーグルへ至る触覚論の系譜の一断面を明らかにする。

4. 『ブロックハウス事典用図鑑—第4部—今日の民族学』（1849年）における
「日本人」（Die Japaner）の項目

馬場 浩平

ドイツ語圏で汎用されている百科事典ブロックハウスは、マイヤー事典やヘルダー事典などと並び、1796年以来ドイツ語圏における教養市民向けに歓談用の話題提供や新聞の用語解説のために発行された「一般知（常識）」（Allgemeinwissen）の供給メディアであるといえる。そのブロックハウス社が1844年から1849年の間に10巻シリーズの付帯事典として発行した『ブロックハウス事典用図鑑』では、科学技術や芸術、または宗教や民族などのテーマが典型的に図像とテキストで解説されている。その中でも興味深いのは、『ブロックハウス事典用図鑑—第4部—今日の民族学』（1849年）における「日本人」（Die Japaner）の項目記事が図像とテキストで叙述されている点であろう。その際、「日本人」に関する記述は「一般知（常識）」の言説というものに根差している、と言えるのだろうか。

ここ15年間の国内外で発表された「ドイツ語圏における『日本』表象」研究では、17世紀から19世紀中葉のドイツ語圏における日本の「鎖国」言説研究や、1860年以降のドイツ語圏における文学作品や旅行記に現れた「日本—言説」研究などにより、著しい進捗が見られたが、19世紀におけるドイツ語圏の教養市民層が共有していた「一般知（常識）」の言説における日本人像の表象という問題は、まだほとんど扱われていない。

本発表では、『ブロックハウス事典用図鑑—第4部—今日の民族学』の Die Japaner の項目にある「日本人」表象に光を当てていく。

5. カール・フローレンツと上田萬年の「翻訳論争」（1895年）と
「その後」をめぐって

辻 朋季

ドイツ人日本学者カール・フローレンツ（Karl Florenz, 1865-1939）は、1894年に上梓した詩集 *Dichtergrüße aus dem Osten: Japanische Dichtungen*（『東方からの詩人たちの挨拶—日本の詩歌』）での短歌や俳句の翻訳形式をめぐり、翌1895年に『帝国文學』誌上で国語学者の上田萬年と論争を繰り広げた。これに関し、先行研究ではしばしば、西洋の文学理論に勝るフローレンツが終始論争をリード

し、上田は次第に感情論に走り民族的特質を強調するようになった、と解釈されてきた。

これに対し本発表では、フローレンツが上記詩集の再版時（1896年1月）に新たに加えた序言や、論争と同年の1895年に出版した翻訳書 *Japanische Dichtungen. Weissaster*（『日本の詩歌—孝女白菊』）に付した序言に注目し、これを上田との翻訳論争と関連付けて分析する。序言はいずれも、その執筆時期が翻訳論争の最中または直後であることから、上田が提起した批判や反論を念頭にして書かれたと考えるのが妥当である。その内容は、論争時に述べた自説の反復の域を出るものではなく、フローレンツが西洋の文学理論に固執して自己正当化を図っている点に変わりはないものの、彼が『帝国文学』で行った主張を自らの翻訳書の序言で繰り返した（またその必要性を感じた）という点は、論争時の上田の反論にそれなりの正当性があったことを示唆するものである。こうした点に立脚して、本発表ではフローレンツの上田との論争の新たな解釈を試みるとともに、彼の翻訳姿勢に潜む西洋中心主義的な態度を明らかにしていく。

ブース発表 V（11:30～13:00）E 会場（125 教室）

Sprachlernspiele – ein Unterrichtsmittel mit hohem pädagogischem Potenzial – Teil 3

Marco Schulze

Vorhaben:

In der Kabinen-Präsentation möchte ich, auf den Inhalt meiner Poster-Präsentation aus dem Frühjahr 2015 eingehend, die wissenschaftliche Grundlage, der dort vorgestellten 15 Eigenschaften/Kriterien der Tätigkeit „Spielen“, vorstellen und diskutieren.

Methode:

Mittels eines diskursiven Vergleichs mehrerer existierender Definitionen bzw. Definitionsversuche bemühe ich mich, die wissenschaftlich-theoretische Grundlage meiner Definition herauszuarbeiten und gehe dabei auch auf die Unzulänglichkeiten in den bereits existierenden Definitionen bzw. die Problematiken der Übertragbarkeit in Hinsicht auf die Zielsetzung meiner pädagogisch ausgerichteten Forschung ein.

Inhalt:

Ich setze mich mit den Aussagen verschiedener wichtiger das Thema „Spiel“ und

„Spielen“ prägender Vertreter auseinander. So werde ich unter anderem sowohl die oft zitierten Aussagen des Schriftstellers und Philosophen Friedrich Schiller, des Kulturhistorikers Johan Huizinger, des Soziologen und Philosophen Roger Caillois, des Philosophen Ludwig Joseph Johann Wittgenstein aber auch neuere Aussagen heutiger Wissenschaftler, wie die vom Pädagogen Hans Scheuerl sowie der Sprachlehrforscherin Karin Kleppin, vorstellen, untersuchen und differenzieren.

Form:

Beginnen werde ich mit einem ca. 30-minütigen Vortrag, an der sich ein reger und konstruktiver Diskurs anschließen soll. Am Ende werde ich meine neuesten Sprachlernspiel-Kreationen vorstellen und die Möglichkeit geben, diese vor Ort auszuprobieren.

ブース発表 VI (11:30~13:00) F会場 (124 教室)

研究グループ試作プログラムによる電子的ドイツ語インデックスの紹介

栗山 次郎

紙に印刷されているドイツ語の文章から電子的インデックスを作成する試みを紹介する。書籍の形での索引や電子化された作品は多く公刊、公開されているが、作品に使用されている全ての単語の全ての使用個所を掲載した索引はまれであり、出版後の修正や追加も容易ではない。また研究者が今手許に持っている書籍に掲載されている単語の全ての使用例を電子化された作品上で検索するには相当の時間を要する。試作品はそれらを克服できる可能性を示す。

インデックス作成にはテキストの電子化と校正が必須である。当研究グループはスキャナーと市販の OCR ソフトおよび MS-Word を使用して電子化し、校正した。さらに試作プログラムを使用してその電子テキストから全単語のインデックスを作成した。このインデックスはブラウザーを利用して見る。

表示できる言語はドイツ語(Fraktur は表示不可), 英語, フランス語, ギリシャ語で, 単語の表示はアルファベット順か使用頻度順かを選べる。

試作プログラムでは 1 巻だけの小規模, 数巻を含む中規模, さらに 10 巻以上にも及ぶ全集などの大規模なインデックスまで作成することができる。

ブース発表の会場では試作したインデックスを PC 上で例示する。また数ペー

ジのテキストの電子化や校正は実際に行う。時間の余裕があれば、会場で作成、校正した電子テキストから電子インデックスを試作する。